東方御伽草子

ナナツボシ(牙狼新シリーズ放送開始!!)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方御伽草子

【Ｎコード】
Ｎ４９６２Ｘ

【作者名】
ナナツボシ（牙狼新シリーズ放送開始！！）

【あらすじ】
幻想郷の人里にある屋台を通じた人間模様。　とくに戦闘も弾幕もなく、幻想郷に住まう者達の一コマを切り取ったお話です。作者の嫁を中心に、まったり更新予定です。

※※リハビリがてら書いてみた東方小説です。子育ての合間の息抜きなので、メインの連載どないやねん！と言う至極当然なツッコミは勘弁して下さい。※※

ある兎の話

ここは幻想郷と言う。

ここに住まう存在は、妖の類い、妖精、幻獣――つまりは我等人間が産まれ、人生を営み、そして朽ち果てる間に備わる常識から外れた存在である。

要は人間が娯楽として接する創作物――昔話、絵本、小説、映画などの所謂フィクションの世界に存在しうる者共が当たり前のように営みを形成しているのだ。
そして少なからず人間も含まれる。

この場所の管理者と言う存在は、やがて完全なるフィクションになる前に、全ての”現実に”存在している者達を箱庭に隔離したのだ。
故に箱庭の外に住まう人間にはフィクションの中の創作物だとて、現実に存在しているのだ。

それが幻想郷なのである。

――東方御伽草子――

ここは幻想郷の中にある人間達の集落である。それなりに人が住み、それなりに栄えており、そしてそれなりに物語が生まれる場所である。

夕暮れの通りには様々な商店が立ち並び、道行く者達に威勢の良い声が飛び交う。あちらでは惣菜を、こちらでは野菜売りがダミ声を飛ばす。

辻売りの八つ目鰻の屋台には既に出来上がった酔っ払いがクダをまき散らし、場違いな西洋風な使用人服の女が冷やかな視線で通り過ぎていく。

ここには確かに営みが存在していた。ただ、それは人間に限らずと言う注釈がつくのであるが。

ひとつ間違いないのは、ここには調和があるという事であった。

さて、この人里の入り口付近の薄暗い場所に、少し中にある屋台とは趣の違う店があった。

店構えは屋台なのだが、周りに何もない場所にぽつんと建っている。

この人里を纏める立場でもあり、人格者である寺子屋を営む女性に言わせると、こんな危ない場所に出店など正気の沙汰ではないらしいが、無愛想で有名な店主は一向に聞きはしないのである。

その屋台の名前は「喰いものや」と言うなんのひねりもない暖簾を掲げ、半年前あたりからひょっこり現れた。

気が付いたらそこに在り、気が付いたら当たり前に馴染み、少なからず常連が付いている。

これはそんな不思議な屋台にまつわるおはなしである。

「だからさぁ、あたしだって頑張ってんのよ！ねぇ聞いてんの？無視すんなオヤジのくせに！悪いと思ったら……ひっく、賽銭いれに来なさいよ！……あ、おかわりちょーらい、ひひっ……」

「黙れ不良巫女……ツケ払ってからいいやがれ。……おらっ熱燗だ」

「んふ～おやっさん好き～ひっく」

「ちっ……調子いい奴め……忌々しい……俺はまだ二十代だ馬鹿野郎」

どうやら今夜の客は店主曰く不良巫女だけらしい。赤いリボンが麗しい巫女がへべれけになっていた。

テーブルに突っ伏したまま酒を呷る巫女姿の少女を眺め、店主の男は渋面にキセルを咥えていかにも迷惑そうに唸っている。

ただ、文句を言いながらも酒を出す辺りは説得力にかけるのだが。

「おっちゃん、なんか喰わせてくれよ！お、霊夢は出来上がってんな！」

「ちっ……またすかんぴんがきやがった。おらっ、飲め。そしてツケ払え」

「そういっても喰わせてくれるおっちゃんカッコいいぜ！愛してる」

「阿呆が。喰ったらこの不良巫女連れて帰れよ。胡散臭い魔法使い」

巫女に続いてとんがり帽子の白黒な少女が飛び込んできた。店主と軽口を交わす辺り、この娘も常連らしい。

こうしてこの屋台の夜は更け、それなりに人が入れ替わっていくのである。

最後の客が機嫌よく立ち去り、店主は屋台をたたむ準備を始めた。店主は伸びを一つしながら釣り銭箱を覗き、そして深いため息をついた。どうやら今夜も赤字らしい。

「……あの腐れ巫女」

ぽつりと悪態をついた店主は、釣り銭箱の中から一枚の紙を摘みあげて忌々しそうに丸めて捨てた。紙にはこう書いてある。

博麗神社と――

それでも一日の労働に心地よい満足感があるのか、店主は少しだけ微笑して片付けに戻るのだった。

「ふぅ……こんなもんか。さて、労働のご褒美っと……」

一通り片付けが終わった店主は、にんまりとしながら豆腐の炒ったものと熱燗を自分の為に用意し、遅い夕食を摂るようだ。

「今夜も月は綺麗だね～っとくらぁ……ん？また来たのか兎」

店主が座るテーブルから見える木陰には、外の高校生のような制服を着た兎の耳の少女が立っている。

「あ、あの、ごめんなさい、えっと、通りかかっただけで、その――」

「おい兎、腹減ってないか？」

あわてて支離滅裂な兎の少女に店主は声をかける。

「えっと、その、はいっ、減ってるかと聞かれたら減っていると答えますが、その、はい、いえ、ごめんなさい――」

「……こっちこい兎。寒いだろうからなんか温かいの作ってやる」

「あの、いえっ、だから、その――」

「……来い」

「ひゃいっ！」

わたわたと挙動不審な兎の少女に、店主の優しい一喝が止めを刺し

たらしい。兎の少女はおどおどと、そして素晴らしい速さでテーブルについた。

席についたものの、兎は銅像のようにお行儀よく固まったまま、愛らしい耳を垂らして俯いていた。店主はそれを横目で見ながら鍋を振っている。

とんっ

やがて兎の前に、食欲をそそる湯気がたち登る丼が置かれた。

「食べな。暖まるぞ」

店主を上目にちらりと見た兎は、すぐに慌てて視線を逸らす。ただ、小さく可愛らしい鼻はひくひくと、湯気に混じる美味しそうな香りに反応している。

丼には何かの腸詰めと、武骨に乱切りされた人参や芋の類いが煮込まれた汁が入っている。

「ポトフってんだ。暖まるから遠慮なくやりな？」

「は、はひっ、あ、ありがとうございます」

「いいから慌てないで食え。俺も夕飯食うからな。慌てないで食え」

「……はい」

「ん」

相変わらず顔は伏せたままだが、兎はやがて確りと頷き、そして食べはじめた。

幻想郷は今は春先である。だが、夜半はまだまだ冷えるのだ。兎が食し、ほう、と吐く息は少し白い。

店主はすっかり冷えた銚子の酒を手酌で飲みながら、彼の唯一の嗜好品であるキセルをふかす。因みに酒は嗜好品では無く、水であると言うのが彼の持論だ。

「……ご馳走様でした。えっと、美味しかったです。はい」

いつの間にか食べ終わった兎が、やはりちらちらと店主を盗み見るように見上げていた。

「お粗末様だ。あとこれ持ってけ」

ぽんっと兎の前に大きめの折り詰めが置かれた。

「へっ？」

「ああ、余った料理だ。お前、ちょいちょいこの辺来るだろ？薬担いでうろうろしてるもんな？だからさ、きっと家族もいるんだろうさ。遅くなった言い訳に土産持ってきな」

にやりと笑った店主はぶっきらぼうに言った。

「わ、わ、ありがとうございます！あ、でもお代が足りないかも、

です…」

不安気な兎に店主は豪快に笑った。そして――

「今日は俺の奢りだよ兎。しょっちゅうウチの店に入りたそうに眺めてたお前さんが、漸く来てくれた記念だ。ありがとうな？来てくれて」

そういって不器用に片目をつむる店主に、兎は暫くぽかんと目を見開き、そして顔を真っ赤にして何度も頷いた。

兎は嬉しかった。

この見た目は冷淡にも見える少女は、その実ひどく臆病なのだ。

されど内気ながらも寂しがりやな性格から、他人と関わりたくとも自分から踏み出せない難儀な性質だ。

薬師を営む師匠の手伝いで時折人里にやってくる少女は、帰りしなに見かける屋台にいつも笑い声が絶えないのを知り、自分もあの輪に入れたらなと思っていたのだ。

だが、性格とは中々かわれない。

そして兎はいつも屋台を眺めては寂しそうに帰っていくのだ。

「あの……鈴仙です」

「んん？」

「えと、その、私の名前、鈴仙です。兎ですけど、鈴仙なんです」

少女は確りと、真っ赤な目を店主に向けた。

「そうかい、鈴仙。俺は次郎だ。宜しくな？どっかの腐れ巫女みたいにオヤジ呼ばわりは許さんぞ？」

そしてまた不器用に片目をつむる店主だった。

「……ふふっ、わかりましたジロさん。私も兎呼ばわりは許さん、です」

「あはは、お前さんも言うね？　ま、次からは金とるからまた来てくれ。さっ、遅いから帰んな？」

二人で少し笑いあい、そして鈴仙は帰っていった。土産を胸に抱えて。

こうしてある日の屋台の一日は終わるのだった。

「おい、鈴仙！」

「はいっ！？」

歩きだした背中に店主の声が飛び、びくりと身体を揺らす鈴仙。

「必ずまた来いよ？」

「……はいっ！！」

笑顔が弾けた。

つづく

登場人物

次郎と言う名の店主

人格者の寺子屋の女性

霊夢と言う名の腐れ巫女

胡散臭い魔法使い

鈴仙と言う名の兎

ある兎の話（後書き）

うどんげ可愛い。ウサミミにブレザーなんて卑怯だと思います。

心の隙間、埋めますか？

宵の口、人里の外れにある屋台では、無愛想な店主が黙々と仕込みをしていた。

ここは「喰いものや」――――妖し達が集う不思議な屋台である。

――東方御伽草子――

この喰いものやを営む店主である次郎は、人里の住人からは変り者と呼ばれている。というのもこの幻想郷と言う場所は、人間が圧倒的に弱者である。

次郎はそんな人間にとっては物騒で世知辛い土地で、好きこのんで妖し相手に店を開いているのだ。

寺子屋の女主人が次郎を「正気の沙汰ではない」と称したのも頷けると言うものだ。

次郎自身は一切の自己主張をしない上に、鳥や野菜類は自給自足し、僅かな足りない物を人里にて買う程度だ。必然的に人里とは疎遠になる。

次郎はただ、寡黙に仕込みをし、当たり前に店を開くのみであった。

淡々と。

すっかり日も落ち、人々が家路につく頃には、次郎の仕込みも佳境に辿り着いていた。その日使う肉の下拵え、作りおきの煮込み等、出来るだけこまめにそれは行われる。

何せ従業員はいないのだ。次郎が一人で全てを取り仕切らなければならない。故に仕込みで料理の手間を七割がた終わらせておくのである。

そして今日の仕込みも滞りなく終わらせ、次郎は一人満足気な溜息をついた。

「次郎様、もう開店してるのかしら？」

一段落して一服つけていた次郎に、闇の中から鈴の音のような声が響く。

「ふん、どうせタイミング見計らってたのだろうに。まぁ座んな、隙間の」

キセルをかん、と叩きつけ火種を飛ばすと、次郎は虚空を見た。

屋台の淡い灯りの向こう側にある暗闇に、更に深い漆黒が開き、無数の目玉が散らばった。その中から異国風の帽子をかぶった、少女

の様でそれでいて全てを達観したような人形然とした美貌の女性が現れた。

八雲紫、隙間の妖怪と言われる幻想郷の管理人たる大妖怪であった。

「ふふっ、客に言う台詞では無くってよ？次郎様。そこが貴男らしくていいのだけれども。ではお任せでお願いするわ」

口元を扇子で隠しながら、少女たる姿に妖艶さを撒き散らし、八雲は席につくのだった。

次郎は伝法な口調ではあるが、それでも手早く肴を身繕い八雲の前に並べた。彼女の好きな濁り酒を添えて。

八雲はその細い喉をこく、こく、と鳴らし、冷えた濁り酒を嚥下していく。そして、ふうと一息つくと次郎に微笑した。

「おいし。ねぇ、この肴はなあに？」

「もやしを炒めて卵を絡めただけだ。お前さん、いつも疲れた顔をしてるからな。女が必要な栄養はもやしに沢山入ってるんだとよ。黙って食え」

目だけで微かに笑いながら、次郎は八雲に講釈を垂れた。

「あは、この幻想郷で私を女扱いするのは貴男だけよ？だって、歳だけは誰より上だもの。口の悪い吸血鬼に言わせると婆ですってよ？」

芝居掛かった口調で八雲はおどけると、少し”しな”を作って次郎を見た。

「女の年の話は御法度ってな。あんたは充分に女だよ。下らねぇこと言ってないで飲んで食え」

「あら、うれし。口説いてくださるのかしら？」

「……阿呆が」

鼻で笑った次郎がまた一品八雲の前に置く。今度は鶏肉を湯がいて薄く切り、山葵醤油を添えた物だ。

「大体な、八雲がくる日は決まって他の客がきやがらねぇ。お前さんが怖いらしい。だが、まともに金を払ってくれる客もまたお前さんくらいなもんだ。つまりは憎たらしい上客様を俺は逃がす訳にはいかんのだよ。忌々しい事にな」

ぷっとキセルを吹き、新しく葉を詰める次郎だったが、僅かに笑っている。彼もこのやり取りが万更でも無いようだ。

そんな次郎の無骨な優しさに、八雲はやはり扇子で顔を隠しながら”芝居掛かっていない”笑みを浮かべるのだった。

夜露が暖簾を濡らす。

十六夜の月が真上に浮かんでいる。

「……次郎、聞いてるの？もう、みんな私の苦労をわかってくれな

いの。でもね？でも、私はこの幻想郷がだ～いすきなのぉ。だから頑張るのぉ。こら次郎！聞いてるのかぁ！」

「あいあい、聞いてるよ。紫は大変だね。偉いね。うんうん」

「次郎！やい次郎！！あなただけよ……ちゃんと構ってくれるのは……ぐすっ…ぐすっ…むにゃ……」

「……泣きながら寝るなよ面倒くせぇ。やれやれ、風邪ひくぞ」

ひとしきり愚痴を垂れた八雲は酔い潰れ、突っ伏して寝てしまった。そんな彼女に次郎は悪態をつきながらも、自分が羽織っていた藍色の絞りの着流しを彼女の肩にかける。

猫の毛のようにしなやかな金色の髪をちらばせ、僅かに紅がひかれた薄い唇を半開きに眠る八雲。今の彼女には妖艶さも強かさも消え失せている。ただの疲れた少女でしかない。

そんな彼女の姿を眺められるのも役得かもしれないと思案する次郎だった。

「……眠ってしまったようね」

ふと目を覚ました八雲が呟いた。

「……そうだな」

「これ、次郎様の着流し。ふふっ、いい匂い」

「……阿呆が」

目は覚めたが瞳は少し虚ろな八雲が次郎の着流しを抱き締める。

「……なんで？」

「ん？」

「なんで優しくするの？貴男少しおかしいわ？」

「今度は絡み酒か？」

片方の眉を器用に上げながら次郎が溜息をつく。

「……貴男、恨み言ひとつ言わないじゃない！責めなさいよ！私を責めたらいいじゃない！この人さらいって！」

急に激昂した八雲が次郎の胸ぐらを掴む。次郎に唾を飛ばしながらいきり立った彼女は自分を責めろと慟哭する。

「責めてよ……責めて欲しくて通ってるのに」

やがて力なくへたりこんだ八雲。涙で汚した次郎の襟をつかんだまま。

「……責めて、どうにかなるのか？」

「だって！！」

「……黙れ。あれは事故だ。事故は不幸だが誰も悪くは無いんだ。

ぐだぐだいつまでもガキみたいに自分を痛め付けるな」

「……だって」

妖しである八雲紫の力、『境界を操る程度の能力』はあらゆる境目を曖昧にし、自在に操ると言うものだ。

この幻想郷とは、博麗の巫女による大結界により外から隔絶されている。そして、八雲紫の境界を操る能力により中と外を行き来してバランスを保っているのである。

妖し、幻想の生き物、それらは全て人間がいてこそ存在しうるのだ。

人間が夢想し

人間が恐怖し

人間が営む。

光があるなら影が存在できる。人間が光ならば、その影が幻想なのだ。

だが人間は自然の理の序列では弱くとも、それを補って余りある知識と知恵がある。それは人間の生活を豊かにし、そして自然の理を歪にしてしまった。

最早人間に自然への潜在的な恐怖は皆無となり、ある意味互いに共存関係であった幻想の生き物は必要無くなった。

脆弱で一人で立つことも覚束ない生き物だった人間は、今や何一つ不自由無く立ち、空すら支配した。

全ての”くびき”から独立し、星の王者たる人間。ある意味それは妖しよりも化け物然としており、本来の化け物は役割を失った。

つまり幻想は真の意味で幻想となり、その産物たる妖しは役目を無くす。

後に待つのは滅びだ。

八雲はそれを是とせず、幻想郷を作った。

妖しを集め、古来からの自然を受け容れる人間を集め、小さな箱庭を作った。

それは一つの世界であり、森羅万象であった。

それは八雲紫の独り善がりたる産物かもしれない。

だが彼女は愛しているのだ。理解はされなくとも。

だから八雲紫は境界を操るのだ。忘れ去られようとしている外の存在を引き込むために。

ある日八雲紫は外の世界にいた。ある妖しを保護するために。そして、実際に引き込もうと隙間を開いたその刹那の話だ。

妖しが隙間に落ち、安堵した八雲紫が見たものは、驚愕に目を見開き隙間に消える人間の姿だった。

最早作業でしかない八雲紫の仕事は、それ故に油断していたかもしれない。

だが、嘆いても遅かった。予定の無かった人間の男は、間違いなく隙間に落ちたのだから。

慌てて追い掛けた八雲紫が見たものは、幻想郷の上空から落下して、ばらばらに飛び散るはずの惨状――ではなく、地面に叩きつけられる寸前に気絶したまま何らかの能力を発現させた男の姿だった。

男は気絶したまま地上約一メートルに”浮いて”いたのだ。

呆然とそれを見つめる八雲紫だったが、それはある事実を示していた。

それは、巻き込まれてここにいるこの不幸な男が、もう外の世界には帰れないと言う事柄である。

はからずも幻想郷の存在を知ってしまい、なおかつ、外の世界で幻想の産物でしかない超自然的な能力を発現してしまった男。

それ故に幻想郷の管理者たる八雲紫は、自らの責任と幻想郷の秩序の為に男を縛り付けた。男の意志がどうだろうと、だ。

だが、男は受け容れた。残酷で不条理な運命を。

搾りだすように苦々しく語る八雲紫を真っ直ぐ見つめ、一言も言葉

を発しなかった男は、彼女がひとしきり語り終えた後にこう言ったのだ。

「宜しくたのむ」と。

そして、色々ありながらも今に至り、男は何となく幻想郷に溶け込み、八雲紫は罪悪感に苛まれていると言う訳だ。

「……俺は、お前さんを恨んじゃいないよ。俺は向こうじゃクズだった。惰性で生きて、霞みたいなもんだったよ」

ぽつり、ぽつりと次郎が語る。八雲はそれを無言で見上げる。

「だから、何も無かったんだよ。俺と言う存在は。……そうだな、確かに不幸過ぎる出来事だったのかもしれない。だが、俺は今こうしてだ、何となく幸せだと感じてる。だから、いいじゃねえかそれで」

次郎の独白を夢遊病のように見上げる八雲。縋るような視線。打算かも知れない、だが八雲は待っている。ある言葉を。

くしゃっ

その時次郎の節くれた手が八雲の髪を撫でた。

「……だから、許すよ。俺は八雲を許す。そして、新しい人生をくれたお前さんに感謝する。ありがとうな、八雲」

八雲の目が大きく見開かれた。待っていた。欲しかった言葉を次郎は発した。

「許す」と。

「あっ、ああっ、次郎」

縋る八雲。

「……阿呆が。もう看板だ。帰れ帰れ」

しっしっと手を払う次郎に、八雲は失礼ねと形の良い眉を八の字にする。そして小さく呟いた。

「ありがとう」と。

そんな八雲を尻目に黙々と片付ける次郎。それをにんまりしながら彼女は残りの酒を呷る。

そしてすっかり片付いた屋台を眺め、満足そうに次郎は頷いた。

「……まだ居たのか。とっとと帰れよ」

「ええ、帰るわ？」

すっかり正気を取り戻した八雲は、扇子で口元を隠して笑っていた。”芝居掛かった”笑みで。

「……お前、ちょっ、何企んでやがっ！！？おわあああああ！！

！ちっくしょおおおぉぉ……」

次郎の足元に隙間が開き、彼は呪咀と悲鳴をあげながら消えていった。

「ふふっ、まだ飲み足りなくてよ次郎」

静寂

登場人物

次郎と言う名の店主

八雲紫と言う名の妖し

名も無き妖し

心の隙間、埋めますか？（後書き）

相変わらずの駄文ですいません。リハビリですからご勘弁を。

今回は八雲紫でした。この人すごく好きなんだけど、二次作品ではやたらと婆扱いか、お姉さんキャラで描かれる事が多い気がします。

そして、人さらいとか、フィクサー的なポジションが多いですよね。

でもたしか幻想郷に来る存在って、外で忘れ去られようとする存在なんですよね、たしか。

個人的には永夜抄までしかやってませんが、どうみても少女にしか見えないので、この作品の設定としては「精神年齢は見た目に起因する」と言う前提で書きました。

可愛いからいいんです、はい。

僕は某動画サイトで人気のあるアレンジ曲や、大手同人屋とかには興味は無くて、単純に東方のカオスな世界観が好きです。

東方のどうしようもないＢ級感がたまらないのです。チープなＳＴＧに不思議な世界観、まぁ、Ｎｏｒｍａｌをひぃひぃ言いながらクリアする程度の能力なヘタレですが。

まぁそんな感じで、あまり二次作品のステレオタイプに引っ張られないように書けたらなと思ってます。

中々難しいですが…。

※※裏設定※※

すっかりタイミングを失った、主人公紹介

名前◇次郎

容姿◇短髪黒髪高身長。痩せ形で三白眼のこわもて。ｘｘｘＨＯＬｉＣの百目鬼をイメージして下さい。（分からなきゃググレ）

過去◇無作為に惰性で生きてたらしいが詳しくは不明である。

性格◇基本的に無愛想。無口。ただ、たまに語る。たまに笑う。

仕事◇幻想郷の人里の外れにて、喰いものやと言う名の屋台を営む。料理や酒は美味いらしい。種類は多国籍でその日の仕入れと次郎の気分で変わる。

能力◇八雲紫しか知らないが、何らかの能力があるらしい。いずれ語られる…かも知れない。

※※※※※※※※※※※※※※

さぁ、次は誰出そうかな…

最強の泣き虫

幻想郷の人里の外れ、妖し達が集う屋台がある。名前は「喰いものや」

そこは毎晩笑い声に溢れ、普段は反りが合わない妖し達が触れ合うと言う。

これは、そんな屋台を営む男が織り成す不思議な物語である。

――東方御伽草子――

幻想郷にある名物屋台の店主である次郎は、夜明けと共に畑の世話をしていた。

茅ぶき屋根のこじんまりとした一軒家が次郎の住みかである。その庭一面に次郎の畑があった。

綺麗に耕され丁寧に作られた畑は、次郎の几帳面な性格を表しているようだ。

「ふぅ、腰が痛いな」

野良仕事着の次郎は、長時間腰を曲げていた辛さから、天を仰いで腰を叩いている。但し顔に笑みを浮かべながら、だ。

ひとしきり作業が終わり、次郎は畑の端にある石窯に火を入れた。
この窯は次郎が山から運んできた石を積み上げて作った、彼自慢の自家製石窯である。
彼が幻想郷にくる前には怠惰な生活をしていたと言う。そんな彼が何故にこんな立派な窯が作れたか？　それは彼の能力の恩恵であった。
彼の能力、それは”くっつけたり離れたりする程度の能力”である。
この能力は次郎の視界にある物を、文字通りくっつけたり離れたりを任意にする事ができる。
くっつける――どんな物も溶接したかのように癒着、圧着、融合させる。
離れる――どんな物（自分の身体含む）も任意に切り離す。切断できる。自分自身を地面から離す、つまり浮く事も含まれる。
と言う訳で、かなり汎用性に溢れ、応用が効きやすいと言える。
対象が生物と考えたら、とても恐ろしい効果を発揮するだろう。ただ、次郎は今のところは生活の中でしか使ってはいない。
ある意味物騒な能力であるからこそ、八雲紫は次郎を縛ったのかもしれない。

閑話休題

窯に火を入れた次郎は、そのまま井戸で汗を流し、寝起きに仕込んでいたパン種の発酵を台所に確認しにいく。

「ん。頃合いだな」

発酵を確認した次郎は手早く成型し、焼き上がりを思ってニヤニヤしながら窯にむかうのだ。

しっかりと温度が上がった窯に次々と成型したパン種を並べ、鉄の蓋をする。

満足そうな次郎は、焼き上がりまでの時間を窯の前で過ごすらしい。とにかくこうして彼は毎朝パンを焼くのが日課なのだ。

次郎は丸太に腰掛け、やはり自作の煙草盆を引き寄せ、キセルに火を付ける。

この時間こそが次郎の至高の時なのである。

初夏の涼しげな風が次郎を吹き付け、鳥の声に耳を傾ける。自然と目を閉じ、ゆっくりとした時間の流れを噛み締める。

「――幸せだな、俺は。八雲に感謝だ」

誰とも無くそう呟いた次郎であったが――

「やぁ次郎、おはよう」

「次郎さん、ご相伴に与りに来たよ！」

そんな静寂を次郎は許されないらしい。

「おはよう、慧音、妹紅。このハイエナ共め」

「あっはっは、そう言うな。お前のパンが美味いのを恨め」

「そうだよ次郎さん、あなたが悪い！」

「けっ、惜きゃがれ。まぁ後少し待ちな。おい妹紅、締めた鳥は台所な？」

「ありがとな、次郎さん」

次郎の庭に入ってきたのは、人里の顔役で寺子屋の主人の上白沢慧音とその親友の藤原妹紅である。

慧音は次郎がこの家を借りる際に世話になり、妹紅は次郎の店の常連であり、たまに次郎が育ててる鶏を買っていく関係だった。妹紅の焼き鳥は絶品である。

「ううん……たまらないな、この香ばしい薫り」

「幸せになるね……」

恍惚と涎を垂らす二人の女性を生暖かく横目で見ながら、次郎は釜

を開けた。

中からは黄金色に焼けたパンが現れた。

「ほら、焼けたぞ。一人二個までだからな！」

お預けを食らった犬の如く、食い入るようにパンを見つめる二人に、次郎はやれやれと言う表情で言い放った。

大小様々のパンは、だいたい二十ほどあるだろうか？それを次郎は次々と籠に入れていった。

「ねぇ次郎さん？四角いやつは無いの？」

妹紅が言う四角いやつとは所謂食パンである。次郎は毎日違うパンを焼くのだ。

「今日は無いな。この細身のがバゲット、太目がバタールだ。ほれっ！」

次郎は説明しながら二人の口に焼きたてパンをちぎって放り込んだ。

「むぐむぐ……」

「あむあむっ……」

リスのように頬を膨らませて一心不乱に咀嚼する姿が愛らしい。

「「う、うまい！」」

「だろっ？バゲットはかりかりに焦げたのが最高なんだ。――さて、朝飯作るから食ってけ」

「「次郎～愛してる～」」

「……はいはい」

調子の良い欠食児童を放置して、次郎は台所に消えていくのだった。次郎の人里の住人との関わりは稀薄であれど、こうして彼を慕う人間は微々たるならがいるようだ。やはり妖しの類いであるのだけれども。

次郎は手早く身仕度し、焼き上げたパンでサンドイッチを作った。半分は三人の朝食として消え、また半分は彼の弁当に化けた。

彼は大きめの厚い布で出来た背負い鞄に荷物を詰めると、二人に別れを告げて魔法の森へと歩いていくのだった。

次郎は数日に一度、徒歩で行ける範囲にある野山に入る。それは畑では得られない山の恵みを手に入れるためである。

この季節は初夏であるから、山菜の類いは時期が悪い。そこで最近は店の常連である”胡散臭い魔法使い”の勧めもあり、魔法の森にてキノコを狩っている。

魔法の森は一年中キノコが生えている。但し、その大半は所謂毒キノコに分類され、中には爆発したり、身体に変化を及ぼしたり等とおよそキノコの範疇を越えた効果を発揮するものもある。

これらはまさに幻想郷たる由縁とも言えるが、幸い次郎はいい意味でかつての常識は捨て去っている為、特に慌てたりはしない。

胡散臭い魔法使い曰く、「色が薄めのキノコは食べれる」とのアドバイスを受けたが、残念ながら次郎はそれを信じたために一週間もの間、肌が緑色になるという快挙を成し遂げた。

以来、彼の新たな常識として、魔法使いのアドバイスは信じないと言うものが加えられた。まぁ、某人形使いや、某図書館の住人等はいい迷惑であろうが…。

何れにせよ次郎は自力での試行錯誤の末、外の世界で食べたような安全なキノコの選別は完了している。自身の犠牲を持ってであるが。

閑話休題

そんなわけで次郎は現在、新緑萌える森の木漏れ日を浴びながら歩いていた。

魔法の森は、まるで太古からそこにあったような厳かな佇まいでそこにあった。次郎が昔、図鑑で眺めたような景色がある。

その中を次郎は、気持ちよさそうに進んでいた。

今日、彼が求める獲物は、向こう側でいうエリンギに似たキノコで、歯応えのある美味なキノコだ。

それを縦に割いて細くしたものにパン粉で衣をつけて揚げたものが、現在次郎の屋台で一番人気の肴となっている。

残念な事にそのエリンギもどきは群生しておらず、次郎はあっちこっちと彷徨うようにそれを狩っていく。そんな手間も”おつ”であると感じるのが、彼の幻想郷での生活が満足のいくものであるのを示している。

そうしてキノコを狩りながら魔法の森を抜けて湖にたどり着く頃には、彼の背負い鞄はキノコでパンパンに膨らんでいた。

次郎はいつも森を抜けると、湖のほとりに腰掛け、対岸に見える場違いな紅色の館を眺めながら一服つけるのがお気に入りだった。

本日もご多分に漏れずそうしようと、やはりお気に入りの巨石の椅子を目指して歩いていたのだが、何故か今日は先客がいた。

次郎がふと立ち止まり眺めた先には、巨石の上で膝を抱える、水色の小さな妖精がいた。

「やぁ、こんにちは」

ひとまず次郎は挨拶してみる事にした。早く一服したいという本音もあるが、その妖精の佇まいに打ち拉がれた印象を受けたからである。

「……人間があたいの縄張りに何のようだ～…」

やはりなにやら覇気が感じられない。次郎の印象として、妖精とは悪戯好きで奔放な生物なはずだ。次郎は「ごめんよ」と一言断り、水色の妖精の横に腰掛けた。

「俺は次郎と言うんだ。君は名前はなんて言うんだい？」

「……あたいはチルノ。さいきょーの妖精さ…」

チルノと言う妖精は、膝を抱えて俯いたままそう言った。

次郎は「そうか」と呟き、弁当を開いてサンドイッチを頬張った。湖を吹き抜ける風が心地よい。

気が付くとチルノは、ちらちらと次郎を窺っていた。だが彼は敢えて気が付かないふりをして、自慢のサンドイッチを淡々と咀嚼していく。

「食べるか？」

「……いいの？」

「……いいさ」

次郎はチルノの顔ほどもあるサンドイッチを彼女に渡した。彼女は無言でそれを両手で抱え、小さな顎を一生懸命動かして食べた。

彼女は口いっぱいに頬張りながら、やがてポロポロと涙を流しはじめる。泣き声は必死で堪えながら。

「うまいか？」

「……まぁまぁね…っく…少しは…ひっ…おいしい……」

「そうか、嬉しいな。それは俺の手作りなんだ」

そしてまた、二人は無言でサンドイッチを頬張る作業に戻った。

「チルノは何故泣くんだ？」

「泣いてない…ぐしゅ…」

次郎はキセルに火を点け、紫煙をくゆらせた。立ち登る煙は、あっという間に湖に吸い込まれた。

「あたい、嫌われたんだ。大ちゃんも、リグルも、ミスティアも、ルーミアも、みんなあたいを嫌いになったんだ……」

ぐしぐしと鼻水を垂らしながらチルノは呟いた。

「そうか。どうしてそうなったか分かるのか？」

「……あたいが…あたいが我儘言ったから…ぐしゅ…だと…ぐえっ…思う」

次郎はキセルに葉をつめ直し、また火を点けた。

「お前は寂しいのか？」

こくこくとチルノは何度も頷き、ぼたぼたと涙が落ちた。

「なら簡単だ。魔法を使えばすぐ元通りだな」

「へっ？…まほー？」

「そうだ。さいきょーじゃなくても使える簡単な魔法だ」

次郎は初めてチルノに視線を向けた。

「知りたい！ジロー、あたい知りたい！」

「そっか、じゃあ特別に教えてやる」

チルノが次郎を見上げ、期待の籠もったような、縋るような目で見ている。

「それはな……」

「それは！？」

次郎はニヤリと笑った。

「ごめんなさい、だ」

「へ？」

「ごめんなさいと言えばいいんだ」

チルノは俯いて唇を噛んだ。

「……許してくれるかな？」
「怖いか？」
「……怖い」
「チルノはさいきょーなんだろ？」
「あたいはさいきょーさ…」
「なら、大丈夫だ」
「……頑張ってみる」

次郎は立ち上がり、帰り支度を始める。
「帰るのか？」
「ああ。またな、チルノ。頑張れよ、さいきょーの妖精」
次郎はふわりと浮き上がり、ゆっくりと進んで行く。そして森の上にさしかかる頃――
「ジロー！ありがとう！ジローはあたいの子分にしてあげる！またねジロー！バイバーイ！」
次郎はくすりと笑って森に消えた。チルノに笑顔が溢れた。

そんなある日の出来事だった。

登場人物

人里の顔役、慧音

焼鳥の名人、藤原妹紅

胡散臭い魔法使い

さいきょーの妖精チルノ

大ちゃんと言う名の妖精

リグルと言う名の蛍妖怪

ミスティアと言う名の夜雀

ルーミアと言う名の妖精

最強の泣き虫（後書き）

チルノっておませな姪っこみたいで可愛いです。

もこたんｉｎしたお

だけどまだモブだよ。

そのうちメイン昇格予定

礼儀の妙（前書き）

いったい何を書きたかったのかが謎

礼儀の妙

この幻想郷には、夜中でも笑い声が絶えない風変わりな名物屋台がある。

その名前は「喰いものや」

店主は無愛想だが、料理と酒は上等と評判だ。常連客はみんな綺麗所らしいぜ。

おっとそこなお兄さん？鼻の下伸ばすのは勝手だが慌てちゃいけねぇよ。

何しろその常連客ってえのは、どいつもこいつも怖ぇ怖ぇ妖しだってんだ。

料理食いに行って逆に喰われたら世話ぁないわな。

度胸があったら行ってみなぁ！

――東方御伽草子――

秋も深まり、薄着では歩くのが難儀な寒さの幻想郷。今年は豊穣の神様もご満悦なほど、人里は豊作の慶びに沸いていた。

人里の名物屋台の店主、次郎の畑も同様に豊作であった。根菜類が山のように収穫できた様で、普段あまり笑わない彼が畑の真ん中で微笑んでいた。

収穫されたものが料理になった姿でも思い浮かべているのかもしれない。

「ふぅ、こんなとこかね」

次郎は掘り終えた里芋とサツマイモの山を振り返り呟いた。さらに視線をずらし縁側を見れば、鶏肉の礼だと妹紅が獲ってきた丸々とした丹波栗が山盛りになっている。

そんな和な光景を眺めていた次郎は、ふと思索の海に落ちた。ある日の記憶が蘇る。

次郎が幻想郷に来る前、彼はいたって普通のサラリーマンであった。そして機械仕掛けのブリキの玩具のように、決まった動きを繰り返す毎日であった。

地方都市の普通の家庭に産まれた次郎は、一生をこんなつまらない田舎では暮らしたくないと、東京の大学へと進学した。

その大学生活の中で彼は彼女に出会った。

花のように笑う彼女に次郎は夢中になり、まるで自分が別人になったような錯覚を起こす程、世界が薔薇色に見えた。

彼と彼女は当たり前のように恋に落ち、当たり前のように口付けをかわし、そして当たり前のように体を契った。

熱病のような恋がいつしか愛にかわった。それは互いが互いを半身であると思える程に。

二人は将来を約束し、次郎が就職して数ヶ月たった頃、彼女は身籠った。

次郎は身体いっぱいに歓喜を表し、そんな次郎を見た彼女は「子供みたい」と揶揄したが、瞳から溢れる涙はやはり歓喜に彩られていた。

その日の夜、二人は裸で抱き合いながら、改めて幸せを噛み締めあった。そして、未来の予定を語り合う。結婚式はここであげよう、ハネムーンは海外がいい？引っ越しもしよう、あの店で見たソファを買おう。

しかし、それは何一つ叶わなかった。それは彼女の定期検診の時に見つかった、彼女かまだ見ぬ子供かの選択を迫られる病巣のせいだった。

二人で血を吐くほど悩み相談した。だが、最後は彼女に半ば押し切られる形で子供を選択した。

それ以降、次郎は毎晩彼女の頭上に命が燃え尽きる時間が見え、最後は０になり絶望する夢を見るようになった。

次郎にとって彼女は全てだった。情けないくらいに愛していた。

頼む神様、いるなら助けてくれ！俺の命をくれてやる！だからあいつと子供を助けてくれ！次郎は毎日そうやって見たこともない神に縋った。

そんな彼の祈りも虚しく、臨月も近いある日、残酷な神は彼女も子供も奪っていったのだ。

急変だった。

あまりに呆気なく、母子は天に還ってしまった。

次郎は以降、酒で身体を痛め付け、毎晩狂ったように自堕落に過ごした。

死ぬ勇気すら持てず、ただ自分を騙した。酒に溺れ、女に溺れ、夜毎彼女の幻影にすがりついた。

そんな生ける屍となった次郎は、気が付くと二十代が終わる間近になっていた。

空虚に支配された次郎が、彼女の月命日に郊外の集合墓地に向かう道すがら――

隙間に落ちたのだ。

「――でも、どうやら俺は幸せらしいよ。……子、俺、こんな訳の分からない土地だけど、ちゃんと生きてるよ。お前と子供の分ま

で長生きするからな」

次郎はそう呟いた。縁側から眺める、幻想郷の素晴らしい山並みを見ながら。

こんな気分になるのもきっと秋のせいだなと、次郎は自嘲しつつ煙管に火をつけるのだった。

「……誰だい？」

さりげなく目尻の涙を拭きながら次郎は不粋な客に呟いた。

「……次郎様、我が主の命にて、貴方をお迎えに参りました」

次郎が声がする方を見ると、そこにはこの田園風景に似つかわしくない使用人服姿――所謂メイド服の娘が立っていた。その口調は丁寧ではあるが、どことなく尊大な印象であった。

次郎は軽く首を振りながら溜息をついた。

「……まずお前は誰だ。そして主の名は？名乗りもしない得体の知れないやつについていく馬鹿はいない」

「失礼しました。私は十六夜咲夜と申します。以後、お見知りおきを。そして我が主の名はレミリア・スカーレット、紅魔館が主にして夜の盟主ですわ」

「……俺は次郎、しがない屋台の店主だ。以後、お見知りおかんでもいい」

次郎はぶっきらぼうに言うと、咲夜など居ないかのように煙管に葉を詰めた。

「……次郎様、返事は？」

「返事？いったい何の？……ああ、お前さんの主とやらが呼んでいるって話か？こう見えて忙しいんだ。また出直してくれ」

「そうですか、では仕方ありません……」

次郎の拒否に対し咲夜の周りの温度が下がった。否定など許さない――そういう事なのだろう。

彼が一瞬まばたきした間に、何をしたのか咲夜は消えていた。いや、正確には……

「……返事は？」

次郎の首筋に銀色の刃が当っていた。どういうからくりか、咲夜が次郎の後に回っていた。そして彼の耳に唇を寄せ、咲夜が囁いた。

「ははは、こちらの都合はどうでもいいと。なるほどな、紅魔館の主とやらはどうやらただの下衆らしいな？」

次郎は首筋のナイフなど気にも留めずに言う。彼は穏やかな口調ながら、その心中は怒っていた。穏やかに亡くなった妻との思い出に浸っていた時間を邪魔したのだ。

「……黙れ」

咲夜のどすの効いた呟きと共にナイフが次郎の首筋き赤い線を引いた。

「……次はかっ切る。返事は？」

「……後悔するなよ」

次郎が呟いた。

次の瞬間、咲夜のナイフが根元から折れた。彼女があり得ない光景に一瞬呆然とした。その間に咲夜は庭に転がっていた。次郎が咲夜の髪の毛を掴んで投げたのだ。彼の指にはごっそりと銀色の髪が掴まれたままだった。

咲夜は混乱していた。何が起きたのか？次郎は一切動いては居なかった。

地面に這いつくばったまま咲夜は考えた。だが、その後頭部を容赦なく次郎の足が踏み抜いた。彼女は意識を失った。

次郎が屋台を出店するまでに、実は二年の間準備していた。八雲紫の隙間にて幻想郷に入ってから、彼はしばらく何もしていなかったのだ。

慧音から空き家を世話してもらい、手荷物の中からいくつか道具屋で外の物を売り払い、決して安くは無い金を得た。

彼はそのまま自堕落な生活を続けていた。惰性で生きていた次郎は、幻想郷にきたとて無気力だった。心に開いてしまった穴は、容易に

は塞がらない。

次郎は酔い潰れて縁側に倒れながら、答えの出ない答えを探していた。そしてある時、彼は山に消えた。

人里では奇妙な噂が流れていた。近くの山で惨殺された妖しの死体が大量に見つかったと言う。その死体は、小間切れにされていたと言う。

あまりの凄惨な姿に、山に入った里の人間は嘔吐感に苛まれたと言う。サイコロ状に刻まれた肉塊を見て。人間の天敵である妖しが駆除された喜びより、この狂気じみた光景を里の人間は嫌悪した。

そう、次郎の仕業であった。張り合いの無い毎日、もう戻らない日々。幻想入りした事で尚更浮き彫りになった孤独。それを身に染みて改めて理解したのだ。

最初は妖しに喰われてしまえと山に入った。大木によしかかり、静かに捕食者が来るのを待った。

やがて現われたのは巨大な狼のような妖獣だった。それは舌を垂らし、牙を剥いた。食事にありつける歓喜に身を震わせ、それは野生を剥き出しにして次郎に飛び掛かった。

次郎は不思議な光景を見た。踊りかかるそれが、真っ赤な口腔内を露にして自分に近寄っている。それを彼は見ていた。

コマ送りで――

死を意識したせいだからか、所謂走馬灯と言う現象なのか、とにかくそれの鋭い牙が次郎の柔らかい首筋に食い込む瞬間――それを彼は感じていた。

肌に牙が触れ、沈み、今まさに次郎の生命を刈り取るその刹那……

何かが次郎の中で爆発した。

彼から獣のような咆哮が生まれ、そして何かが降ってきた。

それは血であり肉だった。細かく小間切れになったそれの肉塊だった。

赤黒く染まりながら彼は叫んでいた。死にたくない！と。この時に次郎と言う”存在”が幻想に産声を上げたと言える。

以来、彼は一年近く森で生きた。獣と言う獣を殺し、幻想郷で生きる術を手に入れたのだ。つまり、自分自身の能力を効率よく使う方法をだ。

幻想郷で生きるとは弱肉強食の理を受け入れると言う事だ。次郎は受け入れたのだ。そして、能力を全て理解した彼は山を降りた。

そして幻想郷に”生きる”一人の存在として、次郎はここにいた。

何人も自分の尊厳を犯すことは許さないと言う覚悟を胸に抱えて。

だらしなく横たわる咲夜を見下ろす彼の目は冷たかった。

ふと咲夜は目を覚ます。辺りは既に暗く、見えない。彼女は鈍く痛む頭痛を振り払い立った。

「お目覚めかい？メイドさん。早く帰ってくれないと仕事に行けないんだが」

咲夜が声のするほうを見ると、縁側には次郎が座っている。但し纏う空気は冷たいままだ。

「……あなた、一体何をしたの！？」

はだけた衣服を直しながら咲夜は言う。若干発する言葉の語尾が震えているのは虚勢だからなのだろう。事実、次郎の得体の知れない不気味さに、彼女の冷静さは消えていた。

「それをお前さんに言う必要性はないな。後はなんだったか……うーん、弾幕とか言うお遊びだったか？それに付き合う気もないな」

次郎は暗がりから咲夜を見据え、にやりと笑う。彼女は息を飲んだ。下手な事をすればこの男は自分を殺す。そう感じた。

「ずっと考えてたんだ。お前さんの力は何だってさ。隙をついてお前さんを投げ飛ばした時を考えたら――殴りあいは並以下だろうさ。ならお前さんの動きは――」

咲夜は唾を飲み込む。肌着を濡らす汗が忌々しい。この男は危険過ぎる。

「時間を止める…かな？まぁ、どうでもいい。無礼な人間にはやり方ってものがある」

咲夜は驚愕する。能力を言い当てられたからだ。種の割れた手品は滑稽だ。完璧で瀟洒と言われたメイドは、今や丸裸のただの女となった。

一歩、また一歩と次郎が咲夜に近づいてくる。咲夜はじりじり後退り、敷石につまづき尻餅をついた。

「やっ…やめっ……たすけっ……」

咲夜に翳される次郎の手、彼女は思わず目を閉じた。抗う気も失せるほどこの場は次郎が支配してた。

「なんてな？」

「へっ？」

にやりと笑った次郎が、咲夜の頭をポンと叩いた。咲夜は鳩が豆鉄砲を食らったような顔で惚けている。

「なんでお前さんの主が俺を呼んだかは知らない。ただな、無礼はいけない。少なくとも理由を聞けば俺だって考える。――と言う事でお仕置きは終了って訳だ。んっ？」

けらけらと愉快そうに笑う次郎に、拗ねたような顔で咲夜は不貞腐れた。

「貴方は「次郎」……次郎さんは酷いです。主より怖かったですわ」
「ま、そういうな。取り敢えずはすっきりしたからいい。んじゃ俺は屋台があるから出掛けるわ。咲夜…だっけな」
そういって腰を上げた次郎に追いすがる咲夜。
「あ、あのっ……」
「ん。どっちにしろ今日は無理だが、明日の晩でも出向くから迎えに来てくれ」
「はい、必ずお迎えにあがりますわ。それと……今日は大変ご迷惑をおかけしました」
咲夜は素晴らしい姿勢で頭を下げた。そこにいたのは完璧で瀟洒なメイドそのものだった。次郎は手をひらひらしながら庭を出ていこうとしていた――が。
「そうだ。お前さんの主に今日掘った里芋、持ってってくれ。今日行けなかった詫びだ」
咲夜は頭を下げたまま、「はい」と答えた。
今宵の月も鮮やかだった。幻想郷の秋は深まる。

登場人物

屋台の店主、次郎

栗を持ってきた妹紅

完璧で瀟洒なメイド、十六夜咲夜

咲夜の主

礼儀の妙（後書き）

咲夜さん登場。別に嫌いな訳じゃ無いです。むしろ好き。ただ、好きな子は虐めたくなるだけです。

つか東方で嫌いなのってムカつく二次設定な八雲紫くらいです。うちの紫は可愛く書きます（笑）

今後は各陣営とまったり絡ますつもりですが、今回紅魔館まで行けなかったのが残念です。

可愛いおぜうを書きたかったのに。

うー☆的なおぜうは書かないけどネ。やはりおぜうにはカリスマ（笑）は必要です。

では次もまったり頑張ります。

夜に生きる者（前書き）

おぜうさま

夜に生きる者

「なぁ次郎、お前は何考えているんだ？もう少し里の人間と交わったらどうだ？今のままじゃ皆がお前を気味悪がっている……」

手酌で日本酒をやりながら、里の顔役である上白沢慧音が諭すように言う。

「ふむ……慧音、お前さんは俺をどう思ってるんだい？」

相変わらず面倒臭そうに話す次郎。彼もまた手酌でやりながら、自慢のキセルでぷかりと煙を吐く。

「いやっ、私はその……好きだぞ？次郎が……」

何を血迷ったか慧音は頬を真っ赤に染めた。

「だってよ？妹紅」

「へっ？」

気が付くと慧音の後ろにはいつの間にか妹紅が立っていた。その表情はにやにやと意地の悪い笑みを浮かべていた。

「……慧音、私との事は遊びだったんだな。不毛な女より、やはり男のぬくもりが堪らないんだね？どうしよう次郎？遊ばれちゃったよ私……」

ぷるぷると肩を震わせ顔を伏せる妹紅。

「慧音、お前さん教育者のくせに両刀使いか……この外道がぁ……」
追い討ちをかける次郎。
「いや、そんな……ちがっ…私はそんなふしだらな真似はっ……妹紅！私は軽い気持ちでお前のそばに等……なんで二人とも笑ってる！？」
次郎と妹紅は声にならない笑い声で震えていた。いや、むしろ痙攣していた。
「いやぁ慧音よ。お前さんはからかい甲斐のあるヤツだな？くくくっ」
「慧音ぇお腹痛いっお腹いた～い…くふっ…」
涙すら流しながら笑い転げる二人だった。
「貴様ら……乙女の純情を弄びおって……許さん」
今の慧音はまさに阿修羅。背後に怒りのオーラを纏っている。
「ちょっ…慧音っ…冗談だって、ね？」
「そ、そうだぞ？ちょっとしたお茶目だ。ほら、そんな顔したらお前さんの可愛い顔が台無――」
「黙れお前らぁ！指導ぉ！指導ぉ！」

激しい炸裂音と共に、慧音の頭突きが二人を襲う。

「洒落に…なら…ん…」

「不死身でも……痛いものは…痛…い……」

無様に崩れ落ちる二人だった。慧音はどっかと座り込み、深酒を決め込んだ。幻想郷の夜はこれからだ。

――東方御伽草子――

騒がしい客で溢れる次郎の屋台は、今夜も繁盛していた。相変わらず妖し相手の商売であるが、この表情豊かな人外達が次郎は好きだった。

「鈴仙、今日は師匠のお使い帰りか？」

先日の一件から、永遠亭の住人である月の兎、鈴仙・優曇華院・イナバは「喰いものや」の常連になった。

「お使いって子供じゃないんですから！お仕事の帰りです！」

「そうかそうか。ほら、甘い卵焼きだぞ」

「わっ、甘〜い、美味しいです次郎さん！」

ぴーんと優曇華の耳が伸びる。余程気に入ったらしい。

「……子供じゃねぇか」

「むぅ……いいんです！卵焼きに罪は無いんです！」

兎の鈴仙は頬を膨らませながらも卵焼きを頬張る。毎度毎度次郎にからかわれながらもやってくるのは、存外このやり取りを気に入っているのだろう。

「すねるな。ほれ、お茶」

「……ありがとです。ふぅ、ふぅ、あちち…」

鈴仙は下戸だったようだ。

「ジロ！この樽でいいの？」

「お、ご苦労さん。それで大丈夫だ。裏に賄い用意してあるから喰いな」

「ありがとジロ！間違わず持ってこれるあたいったら最強ね！」

「おうおう最強だぁ。とっとと飯食ってこい」

「ふふ～ん」

そういって突然現れた青く小さな妖精は消えていった。

「あれっ、次郎さん今の小さいのは妖精ですか？」

きょとんとした鈴仙が驚いたように言う。

「……ああ、あれは一応従業員なんだ。チルノって言ってな、妙に懐かれちまったんだ。毎日のように自宅に突撃してくるから、上手いこと言い含めて従業員にしたってわけだ」

なんだか疲れたように次郎は語る。人に言えないようなエピソードがあるらしい。

「こういってはなんですが、計算とか任せたら…」

「……はぁ…言うな」

「が、頑張って下さい！次郎さん！」

憐れんだように鈴仙は次郎に声援を贈った。妖精があれなのは幻想郷の常識らしい。

「ありがと鈴仙、そういってくれるのはお前さんだけだ……よし、その耳で癒しておくれ…」

「へっ？、いやっ、じじじ次郎さん！？そんな破廉恥なっふわわわわわ…」

有無を言わさず鈴仙の耳をいじり倒す次郎に、真っ赤になりながらもどこか諦めの表情で鈴仙は触られている。一番奥の席に座っていた慧音と妹紅がそれを生暖かく見ている。慧音が若干悔しそうなのが謎であった。今宵も食いもんやは繁盛している。その時――

「次郎様、お迎えに参りました」

客からは陰になる柱の横に、完璧で瀟洒の二つ名に違わない紅魔館のメイド長、十六夜咲夜が完璧な礼で次郎を見ていた。彼は小さく頷くと、手早く土産替わりの惣菜を包み、前掛けを外した。そして、裏でもぐもぐと賄いをパクつく従業員を一瞥し、深いため息をついた。

「……慧音、妹紅、少し出てくるから店番頼めないか？今日の飲み代タダにしてやるから」

「「やるっ！」」

次郎の言葉が終わらないうちに二人は満面の笑みで答えた。現金な物である。

「チルノ、出かけてくるから飯食ったら今日は上がっていいからな」

頬をぱんぱんに膨らませているチルノは声を出す事は叶わず、必死にこくこく頷いている。

「じゃ行こうか咲夜」

そうして二人は、静かに闇に溶けていくのだった。

次郎は一度自宅に戻ると咲夜を表に待たせた。暫くして次郎が現れると、彼女は控え目に嘆息した。それは、次郎は黒いタキシードに花束を抱えていたからだ。そして次郎は土産をお重につめ直し、鮮やかな紅色の風呂敷に包んだ物を咲夜に持たせると、彼女に行くぞと促した。但し花束だけは大事そうに抱えたままだ。

「……次郎様、どうしてお召しかえを？」

咲夜の問いかけはある意味当然と言える。彼女が見た次郎と言う人物は、顔立ちは端正であるが、寡黙で融通の利かない御し辛いと言う印象だからだ。その上腕っぷしは咲夜を軽く捻る程である。彼女がいつもの如く、力技で言う事効かせようとした結果は、彼女自身が自信を消失する程の手並みであった。ならば、客人の礼を欠いた咲夜とその主であるレミリアに対して良い印象を持たないと思うのが自然だ。

「ん？お前さんもおかしな事言うね？せっかく招待されたんだ、汚い格好で行けないだろ？」

何を馬鹿な質問をと言いたげな表情で話す次郎だった。

「で、ですが、昨日私は次郎様にご無礼を働きましたし……」

「はぁ…お前さんも面倒な性格してるねぇ。確かにお前さんは無礼だった。けどまぁ、そいつはきちんと落とし前ついただろ？ならもう手打ちでいいだろうさ。少なくとも俺は、紅魔館とやらに行くのを楽しみにしてるんだぜ？」

そういうと次郎は片目をつぶってみせた。

「分かりました。でも、やはり昨日は申し訳ありませんでした。これ以上は申しませんが、今一度言わせて頂きました。それと、あなたにウィンクは似合いませんわ？」

次郎の言葉に一瞬笑顔を見せた咲夜だったが、すぐに表情を消すと皮肉で返してみせた。どうやらわだかまりは消えたようだ。二人は連れ立って闇夜の空に浮かんで消えていった。

夜空を並んで飛んでいく二人に、霧に噎ぶ湖の畔に立つ洋館――紅魔館が見えてきた。次郎はモノトーンの景色の中で唯一自己主張をしている紅き洋館に、思わずほう、と嘆息した。それを横目に咲夜は誇らしそうに胸を張った。控え目に、であるが。

次郎がここまでの道すがら、咲夜に説明された紅魔館とは、吸血鬼であるスカーレット姉妹と、姉で館の主であるレミリアの親友、パチュリー・ノーレッジ、門番の紅美鈴、そしてメイド長である十六夜咲夜が住人として住んでいると言う。

紅魔館には地上の居住部分と、とある理由で部外者は近寄れない地下部分があり、そしてパチュリー・ノーレッジが書斎のように住まう大図書館と言うエリアがあると言う。

これらの説明を咲夜が次郎にしたのは、客人である彼の安全の為だという。というのは紅魔館に住まう住人全て”少々”気難しい者達であり、客人と言えど普段のペースを変えない住人の気を損ねると無事に済まない懸念があるからだと言うのだ。

普通に考えればおかしな話なのであるが、それが通るのが幻想郷と言う事なのだろう。因みに咲夜が紅魔館のメイド長として、名実共に全てを取り仕切っていると言う件りでは、無表情な彼女には珍しく得意気な表情で語って見せた。

紅魔館の門前に降り立った次郎は、正面にある立派な時計塔を一瞥し、視線を下ろした。そこには館を取り囲む鉄柵によしかかり、腕組みしながら立っている美麗なる赤毛の女性が居た。

咲夜によると彼女が門番である紅美鈴であると言う。彼女は素晴らしいスタイルの持ち主で、顔立ちも秀麗である。鶯色のロングドレスのような出で立ち、腰まで切れ込むスリットは戦闘の際の機能性の為だろう。頭にぽんと乗せられた帽子が、彼女の中の可愛さを引き出しているようだ。

「……行きますよ」

微動だにしない美鈴をじっと眺めていた次郎に、咲夜の何故か不機嫌そうな声が飛ぶ。

「……ああ」

次郎は頷いて正面玄関へと歩を進める。ふと後方から「さ、咲夜さん、ねね寝てはおりませんひぎゃあ！！！？」等と言う悲鳴が聞こえた気がした次郎だったが、敢えて気にしない事にするのだった。理由はとばっちりは嫌だからだ。

そうして二人は館に入り、外観からは想像もつかないほどの長い廊下を進んでいく。やがてそれも終点となり、重厚な木目の扉の前に次郎は立った。咲夜は次郎を制し扉に声をかける。

「お嬢様、お客様をお連れ致しました」

「……お入りなさい」

咲夜の声に、凛とした館の主であろう女性の声が響いた。

「次郎様、中へどうぞ。主がお待ちです」

咲夜が扉を開き、腰を曲げる。次郎は広間を進み、正面の玉座に座る少女の前に立った。

アンティーク調の木製の玉座に座る紅魔館の主、レミリア・スカーレットは美しかった。ブルーサファイアの髪、血の色のような深紅の瞳、桃色の薄い唇から見え隠れする鋭利な犬歯。少女のような体格とは言え、その身からあふれ出る覇気は、流石に館を束ねる者の威厳に充ちている。そのアンバランスさが逆に彼女の妖艶さを引き立てている。

「よく来たわね、歓迎するわ？人間。私がこの館の主、レミリア・スカーレットよ」

レミリアは次郎の目をじっと覗き込みながら淡々と言う。次郎はそれを真正面から見返し、意味ありげに微笑すると軽く会釈した。

「ご招待頂きまことに感謝します。ご所望頂いた人間でございます。こちらは庭に咲いた名も無き花です。それではさようなら、吸血鬼

のお嬢さん」

次郎は張り付くような笑みを絶やさぬまま、花束をレミリアに渡し、さり気なく鼻で笑うと踵を返し出口を目指す。戸口に控えていた咲夜が青ざめた表情で次郎を見ている。

レミリアは非常に困惑していた。

彼女は人里で一際有名な人間、次郎に興味を抱いていた。それはこの幻想郷と言う異質な空間で、殊更異質な妖し相手に堂々と商売をする人間を見てみたいと願ったからだ。

彼女は孤独だ。パチュリーと言う親友はいるが、それ以外に彼女と対等に話せる友人などいない。

吸血鬼と言う種族は長命――いや、その身は既に生命活動を維持していない以上、魂と肉体が朽ち果てない限り不死である。だが、永遠を生きるとは孤独であると言う事と同義である。

見知った者は何れ死に別れる。それ故に孤独なのである。彼女は齢五百才を越えた辺りだが、既にいくつもの別れを経験している。

だからこそ、彼女から見て刹那の年月しか生きれない人間にある種の羨望を感じるのだ。短い人生ながら、濃密な生涯を必死に生きる。それは長命種には出来ない事なのだ。悠久を生きるために希薄になる生き方。それは仕方ない事なのだ。だからこそレミリアはそんな人間の話を聞きたいと願うのだ。

だがレミリアは誇り高き吸血鬼であり、この紅魔館の当主である。まして吸血鬼にとって人間とは食材である。持ち前のプライドの高

さと、捕食者が非捕食者の人生に興味を持つと言うジレンマ、それがレミリアの態度に露骨に出てしまったのである。

彼女は次郎の瞳を覗き込み、吸血鬼の特性である”魅了”の魔法を使い、彼を傀儡にしようとした。だが、彼には一切の効果も現れなかった。魅了の魔法はいかに対象の精神力が強くとも、魔法に耐性かなければ抗う事は出来ない。

しかし次郎には動揺する素振りすら見せなかった。故にレミリアは困惑する。

「ま、待ちなさい！無礼は許さないわ、人間！」

思わず飛び出したレミリアの罵声、それは本心と言うよりは狼狽からでたものかもしれない。しかし戸口で足を止め、振り返った次郎の顔を見たとき彼女は後悔した。何故なら彼の顔になんの表情も浮かんではいなかったからだ。

レミリアの心を支配したのは恐怖。見知らぬ者を見たときに浮かぶ潜在的な恐怖だった。吸血鬼を前に平然と我を通す人間を彼女は知らない。

「吸血鬼のお嬢さん、俺は見せ物じゃあ無いんだ。俺が招待に応じたのは、お嬢さんの面子を潰したと感じたからだ。だがそれは俺がここに来たことで義理は果たしたはずだ。お前さんは俺を人間と呼んだ。だから俺はお前さんを吸血鬼と呼ぶ。礼を尽くせない人間関係に発展は無い。だから俺は帰るだけだ。気に入らなければ殺せばいい。だが俺は死んでもお前さんには屈伏しない」

次郎はつかつかと玉座に歩み寄り、レミリアの耳の横に荒っぽく手

を突き、接吻せんばかりに顔を突き合わせたまま言い放った。

レミリアは人間ごときに圧倒された屈辱感と同時に、この物怖じせずに自分に道徳を叩きつけるこの偉そうな人間に好意を抱くという相反する感覚に混乱をしていた。目が泳ぐ。だが目は離せない。これは一体なんなのか？レミリアは恐慌に陥った。

咲夜ははらはらと経過を見ながらも、何故か次郎を止めなかった。いや、止めてはいけない気がしていた。自らの名付け親にして愛しい主、その人の為に敢えて静観するという選択をしたのだ。

「……さい……」

鼻先が触れ合う距離感の中、レミリアはじっと次郎を睨みながら何かを呟いた。

「……なんだって？」

首をかしげながら次郎がさらにレミリアを睨む。

「……るさい…」

レミリアの瞳は最大に開かれ、やがて何かが盛り上がり、そして零れる。

「……るさい！うるさい！うるさい！何よ人間のくせに生意気よっ！何さ！と、と、友達になりたいだけなのに怖い顔してっ！何よ！何よ！」

ぼたぼたと涙を零しながらレミリアは絶叫する。次郎は一瞬たじろ

いだ表情をしたが、すぐに無表情になると彼女に話しはじめた。
「咲夜に持たせた芋は食ったか？」
「……？？…美味しかったわ？」
「じゃ感想を言ってくれなきゃ寂しいだろうが」
急に穏やかな口調になった次郎に困惑するレミリア
「今日は色々調理したのを持ってきたんだ。楽しみか？」
「う、うん、楽しみ…かもしれない」
二人の背後で咲夜は主の愛らしさに必死で笑いを堪えている。
「この花は喜んでもらえたかい？」
「え、ええ、素敵よ」
「俺の名前は次郎」
「私の名前はレミリア」
「素敵な名前だな。レミリアに似合っている」
「あ、ありがとう…」
咲夜は笑いを堪えているのが困難になり、自らの能力で刻を止めると、声を上げて笑い転げた。完全に手玉に取られおろおろする主。

あんなレミリアを見たのは初めてなのだ。咲夜は次郎に自由にさせて正解であったと思った。あの尊大で自尊心だけが高い、協調性の欠如した主の成長の為に。そして刻は動き出す。

「何か言うことあるか？レミリアお嬢様」

次郎が初めて自分の名を呼んだ！レミリアは許されたのかもしれないと安堵する。今や自尊心はどこかに消えていた。

「ご、ごめんなさい次郎……ただ友達になりたかったの……でもやり方がわからなくて、ごめんなさい次郎、ごめんなさい」

つい、と次郎の親指がレミリアの涙を拭いた。体温がほとんど無い彼女の涙は冷たい。

「じゃ、仲直りだな。俺も恐がらせてごめんなさい。レミリア、今度店に来てほしい。”友達”だからな、次は俺が招待するよ」

すっ、とレミリアから体を離し、次郎は彼女の前に胡坐をかいて座った。背の高い次郎が、彼女の目線に合わせたのだ。

「ありがとう次郎。招待は喜んで受けるわ。だって……友達だもの」

そういってレミリアは伏し目がちに笑った。心からの笑顔に次郎も笑った。

「じゃ、また遊びにくるな、レミリア」

軽く手を振り腰を上げる次郎。

「ええ、必ずまた来てね次郎。お店も必ず行くから」

そうして二人は晴れて友人となり、この不思議な夜会は幕を閉じたのだった。

玄関で咲夜が感謝を示し、そんな彼女に「お前も友人だろうが？」との次郎の返しに酷く狼狽したのはまた別の話である。

次郎は頭に何故かナイフが刺さった門番を一瞥し、闇の中に消えていった。

屋台に戻った次郎は絶句した。

「なぁ、これはどういう事だ……」

呟いた次郎に答えるものは誰もいない。何故なら店を任せた二人とチルノ、胡散臭い魔法使いにろくでなし巫女、角を生やした鬼の幼女が意識を無くして倒れているからだ。

次郎は深いため息をつき、改めて倒れ伏した馬鹿野郎共を見やると更に深いため息をついたのだった。

次郎は全てからになった酒樽に座り、こいつらをどうやって痛め付けるか思案するのだった。

登場人物

紅魔館の当主、レミリア・スカーレット

完全で瀟洒なメイド、十六夜咲夜

レミリアの妹

紅魔館大図書館の住人、パチュリー・ノーレッジ

紅魔館の門番、紅美鈴

人里の顔役、上白沢慧音

慧音の親友、藤原妹紅

胡散臭い魔法使い

霊夢と言う名のろくでなし巫女

喰いものやの従業員、氷精のチルノ

角を生やした鬼の幼女

夜に生きる者（後書き）

裏設定として、次郎はこの幻想郷で生きてくには充分過ぎる能力を有しています（詳しくは前話）

ですが彼は戦闘も弾幕にも関わりたくない普通の人間です。が、自衛のためには行使することを躊躇しません。

前回は咲夜を圧倒し、今回はおぜうさまを圧倒しました。

次郎の能力は「付けたり離したりを操る程度の能力」です。これは解釈次第ではいかようにも幅が広がる汎用性溢れる能力です。

咲夜のナイフを切り、レミリアには魅了の魔法の効果を切って見せた。

レミリアが本気で殺しにかかれば次郎も危なかったでしょうが、礼を重んじる次郎の気迫に場は支配され、おぜうさまは自分を見失いました。

ま、そんな感じです。

次郎は異変には関わりません。それは博麗の巫女の仕事だからです。次郎は酒場の親父として巫女からその話を聞くことはあれど、関わりはしません。能力があれど酒場の親父に過ぎないからです。

さてこの駄文ですが、興味がある方は感想を頂けると嬉しいです。
あと、自分の嫁出してとかの要望も受け付けます。

では

ナナツボシ

風邪っぴきとは心細きもの

何やら外が騒がしい。昨夜も相変わらず寝たのは朝方だ。雨戸から射し込む朝陽の加減を見ると、どうやら二時間も眠れていないようだ。

昨日は山ほど焼いたから、今日はパンを焼く事も無いし。畑は白菜を植えおわった。つまり、寝坊しても問題無いのだ。だから現在何者かがしつこく叩くノックは無視しよう。そうだ俺は何も悪くない。それでは皆様さようなら、お休みなさい……。

「起きろ次郎っ！！！」

うるさいな、俺はまだ眠いんだ。ほっといてくれ。

「起きろってば！」

しつこいな。誰だよ馬鹿野郎。俺は夜中まで働いてた労働者なんだよ。勘弁してくださいよこの野郎。そうだ、こいつも寝かせてしまえばいいのだ。所謂共犯者に仕立ててしまえばいいのだ。えいっ……。

「ちょっ、次郎、やめっ、何するっはぁう、朝から破廉恥ぅぁぁ……」

むむっ？何やら柔らかくいい匂いだな？むっ？むむっ？凄まじく柔

らかいな。これはいい抱き枕だ。むしろ顔を埋めたい、いや埋めよう……。

「ひゃうん！やっ、じろ、やめっ、だめぇぇ！助けてもこーーーーっ！！！！！」

なんだよ五月蠅いな。俺はこの素晴らしく柔らかい枕は離さないぞ。断固拒否だ。む、また誰か入ってきやがった。だが俺は意地でも起きないぞ！

「どうした慧音？って次郎何やってんだ！何て羨まし…ちがっ…慧音変われ…じゃなくて、起きろっ！」

「ギャアアアアア！」

ギャアアアアア！

「私まで燃やすな妹紅！」

殺す気か妹紅！起こすのに妖術使うな！だが、悪いがこの枕は離さないからな！絶対に！

「……次郎、よく見ろ…その枕は何処にある……」

何処って慧音……枕は……むっ？胸ぇぇ！？

「そうだ、私の胸だ。よくも好き放題揉みしだいてくれたな……。妹紅は自分の胸見ないっ」

俺が慧音の胸を揉む？

「そうだ。妹紅、いくら見てもどうにもならん」

と言うことは？

「そうだ」

ちょっとしたお茶目じゃないか。ははは

「ははははははは

で済むかぁ！！！天誅ぅぅぅっ！！！！！」

そうして俺は慧音の頭突きで、物理的に二度寝へと移行したんだ。

――東方御伽草子――

「お前ってやつは本当にどうしようもない奴だ。いくら寝呆けていたとは言えだ、曲がりなりにも乙女のむ、む、胸を揉みしだくなんて常識の欠片も無いぞ？
私のこの豊満な胸に興味を持つなとは言わない。だがな？親しき仲にも礼儀ありと言うじゃないか？ならば、私とお前の仲だとて、やはり段階を踏むべきなんだ。分かるだろう？男女の手順とはこうあるべきと言う段階の事だ。そ、その、わわ、わたっ、私を好きだ等の告白をだな、経てから閨を共にすべきなんだ。そうとなれば私も鬼ではない。むしろ吝かでも無いと言うかそのぅ……。だぁ～！！
つまり、いきなり不埒な真似はいけないと言う事だ！分かったな？次郎！！」

現在、次郎の自宅の居間では、ぼろぼろに焼け焦げた寝間着姿の次郎が巨大なたんこぶを拵えて正座していた。そしてその前に慧音が座り、既に小一時間は説教をしている。妹紅はいい加減飽きてしまったのか、勝手に茶箪笥を開けて茶菓子を食べていた。

「なぁ、慧音。俺は今、お前の胸を寝呆けて揉んだ件で怒られているんだよな？あれ、間違ってるか？」

ぐったりとした顔の次郎は、かなり面倒臭そうに言った。

「そうだっ！お前の破廉恥な所業を咎めてるんだ」

何やら偉そうに頷きながら慧音は言う。

「と言う事はだ、お前さんの話を纏めると……いきなり揉むのはいけない。だが、手順を踏めば問題ない。この場合、俺が慧音を好きと言う意思表示をしたなら問題は発生しない。そう聞こえたぞ。なら言おう、俺はお前が嫌いじゃないし、むしろ好きだ。だから好きなだけ揉ませてくれ」

次郎は真顔で言い放つ。

「ななななっ！！何を言うのだお前はっ！！すすすっ好きとか言うな！ははっ恥ずかしいじゃないかっ！！！」

瞬間湯沸器のように一瞬で赤面した慧音が慌てふためき後ずさる。

「なぁ妹紅、俺、変な事言ったかなぁ？」

「ん～？別に変じゃ無いでしょ？慧音の説教とやらのままだったぞ。と言うか次郎さん、私はどうだ？髪は白いが中々の器量よしだと思うけど」

話を振られた妹紅は、にやにやしながら次郎にしなだれかかった。

「確かに妹紅は美人だな。そういう観点で考えたら、なるほど、吝かではないな」

次郎は腕組みしながらうむうむと頷く。

「妹紅……私に喧嘩を売っているようだな」

「慧音、どさくさ紛れに抜け駆けしたのは誰だ」

何やら次郎を挟んで不穏な空気が辺りを包んだ。

「表へ出ろ！妹紅」

「後悔するなよ慧音」

不敵な笑みを浮かべた二人は、油断無く睨み合いながら外へと消えるのだった。

「……で、一体何しに来たんだよお前ら」

次郎の呟きが虚しく響くだけだった。

ずずず……、静かな居間に茶を啜る次郎がいた。寝起きの濃い緑茶は目覚めを豊かにすると彼は考えている。ただ、外に生きていた時は根っからのコーヒー党だった次郎は、幻想郷に豆自体中々流通しないのが不満と考えていた。

「いっそ八雲にお願いしてみるかねぇ……」

栓のない呟きを溢し、苦笑いをする次郎であった。

「呼んだかしら？次郎様？うふふ…」

気が付くと次郎の背中に寄りかかる八雲紫がいた。

「お前さん、驚かすんじゃないよ。ったく、今朝はろくな事がなおうふっ、八雲の、何か当ってるぞ」

「あててるの。やぁね、次郎様ったら野暮はいいっこなしですよ」

「……阿呆が」

朝っぱらからそんな艶っぽい空気を醸し出していると――がらりと居間に通じる障子が開き……。

「ぐはっ……次郎さん…私が勝ったぞ……」

さらに

「ぶほっ……口惜しや……次郎…私は…諦めな…がくっ……」

血塗れの妹紅と慧音が這うように飛び込んできた。

「次郎さん、私に、勝利のご褒美を……」

吐血しながら次郎に手を伸ばす妹紅。血の涙を流して悔しがる慧音。

そして渦中の次郎は……。

「血塗れの人はちょっと……ごめんなさい！」

「「がくっ……」」

二人は意識を失ったのだった。

「次郎様、これは一体なんなのかしら？」

余りの惨劇に呆れ顔の八雲紫が言う。

「いや、なんかしら用があったらしく、さっき叩き起こされたんだ。そして気が付いたら二人で喧嘩をおっぱじめたって訳だ」

「で、用って何かしら？」

「さぁ……」

首をかしげる次郎と八雲紫であった。

「そういや八雲の。ときにコーヒーは手にはいらんかな？最悪苗でも構わないが、とにかくコーヒーが飲みたいんだ」

「そうねぇ、人里の道具屋で極極稀に見かけるけど、幻想郷では栽培してないわ。う～ん、コーヒー位なら何とかするわ」

「すまんな。礼は何でもするさ。コーヒーの為だ」

「うふふ……じゃ、どんなお礼を貰うか考えておくわ？楽しみねぇ」

妖艶な笑みを浮かべる八雲紫に、思わず失言だったかと肩をすくめる次郎であった。

ややもして、八雲紫はとうに帰り、太陽は随分と登った。次郎は七杯目の茶を湯呑みに注ぎ、煙管に五回目の葉を詰めた。

「お前さんら、そろそろ起きないかね？」

呆れ顔の次郎が仲良く気絶している二人に呼び掛けた。

「「はっ！？」」

「やっと起きたか……」

むくりと起き上がった二人は惚けたような顔で座っている。

「ほら、渋い茶だ」

「すまない」

「ありがと次郎さん」

しきりに首をかしげながら、次郎が出した茶を啜る二人。きっと先ほどの出来事を忘れているのだろう。次郎はしてやったりである。

「で、結局何しに来たんだお前さん達は」

「む、なんだっ…！？…そうだ次郎、博麗の巫女が風邪で倒れたらしい。薬は飲んだらしいが、何せ懐が寒過ぎて餓死しそうだと言う。すまぬが次郎、何か滋養に良いものを届けてはくれんか？何分私は

里を離れられなくてな……」

慧音が済まなそうに言う。確かに半妖の人里の顔役である慧音が、長い時間里を離れて何かあれば大事である。

「あのろくでなし巫女か……まぁ、いいさ。つけも溜まってるし様子見がてら行ってくるわ」

面倒くさそうに言う次郎だが、結局行くのが彼の奥床しさなのだろう。そうして散々大騒ぎした二人は仲良く帰って行くのだった。

次郎は思案する。博麗の巫女の事だ。彼女は次郎の店で飲み食いはするが、実は一度も支払いをした事は無いのである。たまに「次郎さん、お代は入れておいたから」と言いながらそそくさと帰っていくが、後から釣り銭箱を覗くと、そこには”博麗神社”とかかれた御札が入ってる。

初めて博麗の巫女が店にやってきた時の事を思いだし、次郎は思わず吹き出した。彼女が次郎に言った言葉とは――

「ねぇおじさん。私は博麗の巫女よ。お腹が空き過ぎて倒れそうなの！これも全て誰も賽銭箱にお金を入れてくれないからよ！だからおじさん、賽銭がわりに何か食べさせて！」

と、偉そうに彼女は宣った。その余りの言い分に次郎は腹を抱えて笑い、なら賽銭をくれてやると飯や酒を振る舞った。以来彼女は味

を占めたように通ってくる。最も、時折八雲紫が彼女のつけを払っていくのだが、巫女はそれを知らない。

とにかく次郎はこの破天荒な巫女を気に入っていた。八雲紫に聞いた話であるが、彼女は時折起こる”異変”と呼ばれる幻想郷の危機を解決し、外界と幻想郷を隔てる結界を維持していると言う。

だが、彼女自身の能力のせいで、誰からも浮いた存在だという。つまり彼女は、過酷な義務を背負いながら、孤独を強いられていると言えるのだ。

彼女を慕い、好意を抱いている存在がいても、気が付くと最終的にどこにも属さない彼女がいるのだ。

次郎はそれに同情はしない。何故ならそれは彼女自身が選択した道だからだ。だが、自分が何かしてあげるのは自分の勝手だと考えている。だから次郎は荷物を詰める。背負いきれない程大量の荷物を。

博麗霊夢は高熱で朦朧とした視界のなか、この額の心地よい冷たさはなんだと考えている。さらに脇の下にも冷たい手拭いがはさんであり、昨夜のような辛さは減った気がしていた。取り敢えず、眠ろう。何も考えたくは無いから。

「お腹すいた……」

彼女はふと目が覚めて思わず呟いた。なにせ彼女は昨夜から何も口にしてないのだ。

「食欲あるか。待ってな？」

彼女は何か聞こえたような気がしたのか、視線を左右に動かしたがやがて力尽きたように目を閉じた。

「おい、おきろ」

彼女の肩が軽く揺すられる。ゆっくりと目を覚ました霊夢の視界に次郎が映った。

「なんで…いるの？次郎さん……」

まだ熱が引かないのだろう、霊夢は荒い息をしながら目の前の次郎を見つめる。

「黙れ病人。口あけろ」

「なによっ…あむっ……やだ、おいし」

「擦った林檎だ。のど越しが気持ちいいだろ？」

何だか騒ぎそうな霊夢の口に、有無を言わさず匙を突っ込む次郎。

「もすこし…たべる」

「そうか、食べろ」

静かな和室に霊夢の咀嚼音だけが響く。彼女の視線は相変わらず次郎を見ないが、表情に険はない。孤独を好む霊夢だとて、風邪で臥せていれば心細いのだろう。静かな時間だけが流れる。

「なんか、お父さんがいたらこんな感じなのかもね……」

ふと霊夢が呟いた。

「そうかも知れないな。俺は早くに両親と死別したから記憶には無いが、きっと親の温もりとはこういう時に感じるのかもな」

外の景色を物憂げに見ながら次郎は語る。霊夢の呟きは次郎の内面にある記憶を探る引き金になったようだ。

「私も両親の記憶は無いんだ。そっか、私たちは似た者同士だね、次郎さん」

霊夢は初めて次郎を真っ直ぐ見ると、少しだけ笑った。

「ねぇ次郎さん。外に帰りたいって思ってる？」

次郎は暫く思案する。

「いや、俺の居場所はここにある。屋台があって、毎日似たような奴等が騒ぎに来て、その中に俺がいる。この先どうなるかなんて想像はつかないけれどな。でも俺は約束したんだ」

次郎は微笑し、霊夢を見た。その目は彼女が初めて見る優しい目だった。

「約束？誰に？」

「今は心の中にいる妻と、産まれてくる筈だった子供にさ。俺は幻想郷に来る迄、いや、来てしばらくは生きる事が地獄だった。神さえ呪ったよ。けど、幻想郷は優しくてなぁ……いつの間にかちゃんと生きてみようと思ったんだ。ここで幸せになりたいって思ったんだ。……喋り過ぎたな。誰にも話してないんだ。内緒だぜ？」

次郎は照れたように笑った。

「へ～次郎さんにそんな歴史があったんだ。風邪ひいてなんか得した気分よ。でも、心細かったから話し相手になってくれてありがとう……」

照れ臭いのか、布団で顔を隠す霊夢だった。

「さて、少し元気になったな。うどんか卵粥どっちが食べたい？」

「うどん！」

「ようし待ってろ。俺が台所いってる間に着替えておけよ？流石に着替えは出来なかったからな」

「うん、わかった。おとーさん」

「……阿呆が」

こうして次郎は霊夢の熱が下がるまで甲斐甲斐しく世話をし、翌朝帰っていった。人は誰しも床に臥せれば心細いもの。それは博麗の巫女も例外では無かったようだ。

幻想郷のとある一日の出来事は、緩やかに優しく過ぎていったと言うお話。

登場人物

博麗の巫女、霊夢

騒がしき隣人、上白沢慧音

騒がしき隣人、藤原妹紅

妖艶な隙間妖怪、八雲紫

風邪っぴきとは心細きもの（後書き）

なんか慧音妹紅の絡みが恒例になりつつある今日この頃、なんかこの二人好きなんですよね。

どうやら二人は次郎が気になるようですが、次郎はじゃれあう二人をからかっているだけなのかな？作者も知りません。

今回は霊夢が主役でした。シニカルな巫女の弱っている感じを書いてみました。カッコいい霊夢は皆さんの作品にお任せして、僕はひたすら日常のみです。

博麗神社に向かう途中、ルーミアに出会う話を書こうかな？とか思いましたが、それもまた皆さんの作品にお任せしました。そーなのかー。

次郎にヒロインが出来るとしたら一体誰なんだろうか？いないか。キャラがオッサンだし。

時間はどうしよう。

白玉楼か永遠亭あたりの誰かを書こう。そうしよう。

酷く迷惑な客（前書き）

もこたん、脇役から一気にメインキャラ昇格か！？

酷く迷惑な客

「なんか納得いかない……」

次郎は呟いた。どうしてこうなったとも感じていた。とにかく彼は人生とはげにも不条理なものよと歯噛みした。

なぜなら……

――東方御伽草子――

次郎は現在途方に暮れていた。その原因は目の前でその可愛らしい顔をさらに素晴らしい角度に曲げ、女性の表情を最大限に活かす極意とも言える完成形を披露している目の前僅か３０センチに接近している藤原妹紅にあった。

ある種の完成形、つまり、女性の武器とも言えるその姿とは、所謂上目遣いと言う表情である。

そもそもはこうだ。ぽかぽかしたある午前中、縁側に座る次郎は少し大股を開いてリラックスしていた。自慢のキセルをくゆらせ、相談があると現れた妹紅の話を聞いていたのだ。その彼女の相談とやらの雲行きが怪しくなり、次郎が難色を示しだしたあたりで彼女は

実力行使に出たのだ。

妹紅は平安の古から生き抜いてきた手管を駆使し、次郎が一瞬目を離した隙にだ、素晴らしい速度で次郎の広げる足の間に膝まづいていた。次郎は不覚であると狼狽えた所、彼女はその白魚の如き白磁のような肌色が美しい指先を次郎の太ももに置いた。

次郎がさらに狼狽えた。次郎はこう見えて一途で一本気な性格である。亡き妻への操ではないが、男女の”そういう”やり取りとは、少々遠ざかっていた。それ故次郎は初な少年のような反応になってしまったのである。

藤原妹紅とは元来勝ち気な性格である。何故ならばそうしないと生きていけなかったからだ。彼女が産まれた平安の世は、貴族が幅を利かせる封建社会である。男尊女卑が当たり前な社会なのである。

女は政治の道具であり、政略結婚の駒として、家と家のパイプとなる。鎌倉の世になり武家が台頭してからは、その社会システムは完全に定着し、それは近代昭和初期に至まで続いた。

竹取物語の主人公であり、現在迷いの竹林に建つ館の主である蓬莱山輝夜、所謂かぐや姫は求婚してきた妹紅の父を袖にした。その結果、彼の心情がいかなるかは今となればわからぬが、とにかく彼女の父親はやがて死んだ。

妾腹ではあったが、深く父を愛していた妹紅は酷くそれを嘆いた。その結果は輝夜に憎悪を向ける事となり、輝夜が月に帰る際に帝に残した不老不死の薬を奪い、飲んだ。

それまで美しかった妹紅は、体の色素が完全に抜け、髪は白色、肌

も白色、瞳は真っ赤になってしまった。

彼女は人の身でありながら、人ならざる姿となり、人からも妖しからも忌み嫌われる存在となる。不老不死の副作用である。結果、彼女は人の目を縫うように生きざるを得ず、虚勢で身を固め、妖術を習い武装した。そして幻想郷に辿り着く迄の長い間、常に神経を尖らせて生きてきたのだ。

幻想郷に入ってから彼女は”ひょん”な事からある出会いを果たす。そう、蓬莱山輝夜との邂逅である。邂逅とは思いがけずに出会うと言う意味である。妹紅にとっては正に寝耳に水である。月に帰ったはずの輝夜が幻想郷にいた。

それまで生きるために必死だった妹紅の中に炎が灯った。憎悪の炎である。二人はすぐさま殺しあった。腕が吹っ飛び、目は抉れ、心臓を握り潰した。だが滑稽な事に結末は「振り出しに戻る」であった。

二人共不老不死である。つまり死ねぬのだ。いくら屍のような肉塊をさらそうとも、やがて時計の針を逆巻きにしたように肉体は潤いを取り戻す。

だが、悠久を生きるとは孤独と同義である。まして、ある事情で隠れ住むしかない輝夜と、人に忌み嫌われる妹紅は尚更である。

そんな二人が殺しあう際、不思議なシンパシーを感じる事になる。永遠の孤独の中、殺しあう時に感じた痛みが、単調で退屈で苦痛な時間に潤いを与えたのだ。それは発見であった。

死ねないからこそ成立する娯楽。痛みと言う現実を享受する非死亡

遊戯。二人は逆説的な友情を産み、以後、睦みあうように殺しあった。それは自分は確かに生きてると言う事実を確かめる確認作業だった。

妹紅の憎悪とは、ある意味生きる糧だっただけであり、真の意味での憎悪ではない。本音はどうでもいいのだ。永遠の中の一瞬でしかない憎悪、それは世紀を跨ぐたびに薄れていく。ただ、希薄になる毎日を引き締める為に憎んだのだ。目的が、ただの別の手段に転化したと言う訳だ。

一番最初に輝夜と殺しあった際に妹紅はそれを実感してしまったのだ。

以後は日がな輝夜と殺しあい、慧音と言う莫逆の友を得て、人里にも馴染んだ。妹紅は安らぎを手にしたのだ。言葉遣いは粗野であるが、心は軟らかくなった。

それでも妹紅は親しくない人間には辛辣であった。隠れすんできた弊害と言うか、とにかく対人関係を構築するのが苦手だ。人里ですれ違う者や、物売り相手には人当たりの良い態度であるがどこかよそよそしい。要は他人に必要以上に踏み込ませない空気を常に纏っている。

幻想郷に来るまで彼女は、日々の糧を得るために退魔師の真似事をしていたが、刹那的には感謝されても、どこか妖しと同類に見てくる人間を、妹紅は基本的に信用していない。むしろ命を狙われたりすらした。ならば始めから馴れ合うべきではないと言うのが彼女の処世術なのだ。

そんな彼女も慧音に出会い、変わった。慧音は良い意味でも悪い意

味でも愚直なまでに真面目だ。彼女はハクタクと言う妖しが混ざった半人半妖である。ただし、満月の夜以外は基本的に人間のなりをしている。

彼女自身、幼少の頃から人間に差別的な待遇を受け、ある意味では人間に絶望していた。だが、半分が人間の我が身である。その不安定な存在だからこそ、真摯に自分の存在理由を探し続けた。

彼女も幻想郷にたどり着き、何者も受け入れる世界で居場所を見つけた。半人半妖でありながら、人里で生きる場所を。幻想郷の人間は、彼女を真面目な人格者として受け入れたのだ。

気が付けば人里の顔役として人間を守り、教育する立場と言う存在理由を見いだした。半妖の自分を受け入れた――その事実だけで彼女は充分だった。以後、慧音は人間を妖しから守る事を自分の仕事とした。

そんな慧音はどこか冷めてる妹紅に説いた。孤独に生きるのはやめろと。

それは綺麗事だと切り捨てる妹紅に、慧音は懲りずに繰り返し説いた。時には涙を流し、時には実力行使も辞さずに。そしてある時慧音は言った。”半世紀もこうして語り合う我等は友人ではないか？少なくとも私はお前が居なくなれば悲しいぞ”と。

妹紅は暫く呆然とし、そして言った。”ならば後半世紀、お前と友人とやらをしてみるか。そうすれば真実かわかるだろう”と顔を赤らめたのだ。

慧音はお前は天邪鬼だと笑ったが、それを機に妹紅は少しだけ柔ら

かくなったのだ。因みに半世紀経った後に慧音が”そういえば例の答えは分かったか？”と尋ねた事がある。

その質問に対して妹紅は”例の答え？なんだそりゃ？”と慧音を呆れさせたと言う。

そんな妹紅がさらに変わることになる出会いがあった。次郎である。

ある日妹紅は慧音と飲んでいた。すると慧音は言った。最近できた不思議な屋台がある、と。彼女曰くその屋台とは、店主は人間ながら妖し相手に商売していると言う。

そんなわけあるかと妹紅は鼻で笑い、意地になった慧音が”ならば今から行こう”と始まった。

実際その屋台は存在し、店主は変り者だった。無愛想だが味は確か。妖し相手に全く動じず、異形の妹紅を見ても眉一つ動かさない。

差別しない店主の態度を嬉しく思ったが、逆に只の人間のくせにその態度はなんか癪であると妹紅は店主に絡んだ。

結果は”他の客に迷惑だクソガキ”と言い放つや、店主は妹紅に凄まじい拳骨をお見舞いした。妹紅は思った。慧音の頭突きより痛いと。

そうは言っても妹紅である。頭に来た、表に出ろと啖呵を切った。弾幕ごっこだと息巻いた。結果は表に出るどころか更に数発拳骨をもらい、そしてお前が悪いと慧音に止めの頭突きで騒動は終了した。

次郎との出会いは妹紅にとって鮮烈だった。彼にとっては人間も妖しも関係ないのだ。客か客ではないかだ。そして、客ならばとにかく美味い酒を飲んでほしい――その一念だけなのである。

妹紅は次郎に聞いた。”私を見てどうおもう？”と。

次郎は答えた。”見た目は綺麗だが、激しく迷惑な客だ。頼むから静かに飲んでくれ”と。

妹紅は綺麗だの件に大いに赤面しながら、この自分をお嬢ちゃん扱いする不思議な人間の男を気に入ったのである。

この次郎の自然体な価値観は以後も変わらず、二人は今日に至るまでほぼ毎日、彼の店に通っている。因みに昼間は家にも押し掛けるのであるが。

そしてある時、妹紅は慧音に相談した。自分はどうやら次郎を好いているらしい、どうしたらいいか？と。しかし妹紅は満足な答えを得られなかった。何故なら慧音はこう言い放ったからだ。

「その相談には乗れない。私も次郎を好いているらしいからだ。むしろお前が次郎を好きならば、我等は敵である」

堅物で有名な慧音が赤面しながら言ったのだ。これは真実であると妹紅は感じた。と同時に莫逆の友であるが、この戦いには負けられないとも感じた。

そして二人は誓い合った。抜け駆けはしないで正々堂々と戦ろうじゃないかと。ここに二人の紳士協定が結ばれたのだ。

だが、一番の敵は互いでは無かった。最大の敵は次郎だったのだ。二人が彼の自宅に出入りするようになって気が付いたのだが、彼には何やら過去に重しになるような経験があるらしい。それと、こちらの理由が一番なのだが、とにかくあの飄々とした性格が難敵なのだ。柳に風と言うか、打っても響かぬ破れ太鼓というか、とにかくだ、どれだけ二人が言葉に気持ちを滲ませようと、次郎はのらりくらりと躱すのだ。

鈍感ならまだ救いがある。だが、次郎は二人の気持ちを察しながらにやにやと笑って躱すのだ。二人からすれば子憎たらしい事この上無い。

だが最近、それにも若干の光明が見えた。同じ屋台の飲み仲間である八雲紫によると、彼は直接的な接触には弱いらしいと。具体的には胸を当てる等だ。

しかし、男女関係に非常に奥手な妹紅は悩んだ。自分には八雲や慧音のような胸もないし、冗談半分の言葉ならいざ知らず、真面目に愛を告げるなど絶対に無理だ。まともに話せやしないのは想像できるからだ。

そこで妹紅は考えた。自分の性格上、直接的なアプローチはむりだ。ならば時間をかけてやろうじゃないかと。幸い妹紅には焼き鳥の名人と言う技能がある。ならばその腕を売り込み、次郎の屋台で雇ってもらおうと。

この際抜け駆け云々はどうでもいい。だって慧音は胸があるじゃないかと妹紅は自分を正当化した。

そして場面は冒頭に戻る。

「な、何するんだ妹紅？離れろ」

「いいからお願いを聞いて。ね？次郎さん」

「くっ……上目遣いとは卑怯だぞ妹紅……」

妹紅は爪先で次郎の太ももをかりかりと掻きながら、しなを作って次郎を見上げる。

「な、なんだよ相談って、早く言えよ……」

次郎、四面楚歌

「ねぇ次郎さん、私を店で使って欲しい。焼き鳥焼いたり他も色々できるしさ。ね？」

妹紅、必殺の首傾げを披露する。

「……くっ、チルノがいるし……む」

「ね？」

妹紅、太ももに頭を乗せてさらに上目遣い。

「……わかった！雇うから！離れてくれぇ！！」

藤原妹紅、完全勝利の瞬間であった。

こうして人里の名物屋台「喰いものや」に新しい従業員、藤原妹紅が誕生した。

それを知った慧音は、抜け駆けであると地団駄を踏んで悔しがり、妹紅は優越感に浸ったのだが、世の中そう甘くない。

因果応報と言う言葉を妹紅は近いうちに知ることになる。

次郎はこっそり呟いた。

「妹紅め、絶対に仕返ししてやる。くくく……」

登場人物

押し掛け従業員、藤原妹紅

堅物で有名、上白沢慧音

かぐや姫、蓬莱山輝夜

豊満な胸の持ち主、八雲紫

憐れな子羊、次郎

酷く迷惑な客（後書き）

もこたんｉｎしたお！

だって、可愛いから仕方ないじゃない。

STAND BY ME

幻想郷には、いつも霧の深い湖がある。それは深い森に囲まれているためなのか、はたまた多湿な気候のせいかは謎であるが、とにかく年中霧に囲まれているのである。

森側の湖岸から見て正面に見えるのが、吸血鬼を主とした集団が住まう紅魔館であるが、霧の為に淡く浮かぶ様に見える為、その妖しさを増している。

そんな湖の付近には沢山の妖精達が住んでいる。その中にチルノと言う氷の妖精が居た。

最近のチルノは物憂げな視線を湖に向けながら、座ったまま一日を過ごす事が多い。妖精は基本的に食事が必要無いため、狩りをしたり等の生産的な活動はしない。

ただ精霊に準じた存在なので不思議な能力を持っていたりする。例えば空を飛んだり、何かを癒したり、とにかく色々いる訳だ。

チルノは氷の妖精であるから、冷気を操ったり氷を作り出したり等出来たりする。そのせいか暑さが苦手だったりするのだが、身体が氷で出来ている訳ではないので少々ぐったりする程度である。

そんな妖精達の生態は様々であるが、共通するのは持て余す時間を楽しむ娯楽として、他者に悪戯をしたりすると言う事だ。チルノもその例外では無いのだが、何故か最近の彼女は元気が無いのだ。

「ふう……」

今日もまたチルノは、湖畔の石に腰掛けながら、湖に向かって氷塊を投げつけため息をついていた。

「チルノちゃん、どうしたの？一人でこんなとこにいるなんて」

「そうだよ～。最近チルノちゃんが一緒に遊ばないから心配なんだよ」

大妖精とリグル、チルノが仲良しな妖精仲間なのであるが、いつも元気なチルノがしょんぼりしているのが気になっているのだ。

「うん……あたいもよく分からないんだ。けど、なんかもやもやして動けなくなっちゃうんだ」

チルノは膝を抱えて顔を伏せる。それを見て大妖精達は酷く狼狽した。普段のチルノは能天気なほど明るいのだ。こんな憔悴したチルノを見るのは初めてと言っていいだろう。

「ち、チルノちゃん、何か気になる事でもあるのかい？」

虫妖精であるリグルは、頭の触角をぴこぴこと揺らしながら聞いた。

「えと……ジロがね、パンで、おいしいって思ったの。だからあたい、嬉しいけど、ジロわかんないからもやもやするの」

大妖精達はぽかんとしている。チルノの説明は全く意味不明であり、支離滅裂だからだ。ただリグルは懲りずに繰り返し尋ねた。小一時間ばかり。そしてリグルは漸く悩みについて把握出来たのであった。

それでもまだチルノの説明は過多であり、二人は一生懸命に余計な部分を削ぎ落として理解出来たのであるが、それは余談である。

二人が理解したチルノの悩みとは――前にチルノが大妖精達と喧嘩し、落ち込んだ時、人里の人間ジロが慰めてくれた。ジロはおいしいパンをくれた上に、仲直りの魔法を教えてくれた。お礼を言いたいけど、それっきりジロを見かけない。――と言う事らしい。

「ほぇ～そんな優しい人間がいるんだね～」

リグルは感心した。

「優しいね。でも魔法ってなんなんだろう？チルノちゃん、魔法ってなあに？」

大妖精は優しい人間の存在に驚きながら、魔法が気になるのかサイドテイルの髪を揺らして興奮している。

「うん、魔法はね、ごめんなさいの魔法だよ！」

チルノは立ち上がり、誇らしげに胸を張り言う。

「「ごめんなさいの魔法？」」

二人はチルノを見上げ、不思議そうな顔をした。二人が知る魔法とは、黒白や図書館の魔女が使う魔法の事だからだ。

「えと、勇気をだしてごめんなさいと唱えたら、仲直り出来るんだよ！」

ますます偉そうに胸を張るチルノに、二人は思わず笑みが零れた。

「「それは凄い魔法だね！チルノちゃん凄いや」」

「うん！」

誰かと仲違いをしたり、何かを失敗したり、誰かを傷付けたり……そんな時は皆、素直にごめんなさいと言うのは難しい物である。意地っ張りなチルノなら尚更だ。

普段から特にチルノと仲が良い大妖精は思った。チルノを言い聞かせ、勇気を持たせたジロは凄いと。だから思う。チルノはジロにありがとうと言いたいのだと。そして、願わくば友達になりたいのだと。

「チルノちゃんはどうしたいの？」

「うん、チルノの気持ちが大事だよ～」

二人はそういって答えを促すが、チルノは益々沈んでいく。妖精は本来は漂うものである。そこに存在しているが、かといって積極的にその他の存在に関わっていく事もない。

チルノ達のような妖精の中でも自我が強い存在だとて、それは基本的には変わらない。だからチルノは生まれくる感情に戸惑い、恐怖する。

どうしていいか分からないのだ。何故ならば、今までそう感じた事が無いからだ。大妖精は悲しくなってしまった。こんなチルノはチルノじゃないと。リグルはリグルでおろおろしてるのみである。

気が付けば三人は向き合ったまま膝を抱えてどんよりとしていた。

ややもして――――

「そうだっ！ジロさんを捜してみよう！」

突然大妖精は立ち上がり叫んだ。

「え？だ、大丈夫かなぁ…嫌われたりしないかな？」

チルノは不安気だ。

「大丈夫だよチルノちゃん！私も手伝うからみんなで捜そうよ！」

リグルも笑顔で立ち上がる。

「ほら、チルノちゃん？魔法を習ったんでしょ？勇気出してみましょう！」

「そうだよチルノちゃん！勇気だぞ～」

二人はそうしてチルノの手を引き立ち上がらせた。

「うん！あたい、頑張る！ジロに魔法習ったもん！今度はありがとうの魔法だ！」

「「お～！！」」

そして妖精達は空へ飛び立って行くのだった。

――東方御伽草子――

夕暮れの通りを次郎が行く。行き交う人々は足速に過ぎ行き、幻想郷に夜が来るのはあと少し。

次郎は昼間の間に仕込みを済ます。その為、開店間際は割りと暇だった。

いつもはカフェで一服したり、足りない食材を物色しながらのんびりと過ごすのだが、今日の次郎は異様な雰囲気である。

現在彼は人里の通りをまるで忍者のように隠れ進む。キョロキョロと背後を伺いながら、通り脇に立ち並ぶ建物の影に身を潜めて屋台を目指していた。

そしてあと少しで屋台につくという場所で――――

「おい次郎、そこで何やっているんだ？」

軒先に隠れる次郎の背後から声がかかる。だが彼の行動は速かった。次郎は咄嗟に身体を反転させると、その何者かの背後に回り、背中から抱き付いた。右手は口を抑え、左手は腰に回してがっちりと締め付ける。

「ムグー！ムグー！」

「（しーっ！静かにしろ！見つかるだろうが！）」

「ムグッ？ムグムグ？」

「（そうだ胡散臭い魔法使い、とにかく黙れ）」

「ムグっ」

そう、曲者の正体は次郎曰く胡散臭い魔法使いこと霧雨魔理沙であった。次郎としては騒ぐ魔理沙を黙らす為の行動だったが、今の体勢は少女を襲い、物陰に引きずり込む怪しいオッサンだろう。事実魔理沙は羞恥に赤面してる。

「は、離せよ次郎！全く助平な男だぜ……」

開放された魔理沙はぶちぶちと不満を述べるが、次郎はそれを無視して通りを警戒している。所謂セクハラをされた魔理沙であるから、その不満は当然であるが、にしても次郎の行動は不可解だった。

「なぁ次郎、一体何をしてるんだ？やたら怪しいんだぜ……」

やれやれと言うように魔理沙はごちるが、突然次郎が振り返り魔理沙の肩を掴んだ。

「やい黒白！」

「な、なんなんだぜ…」

「お前、どこから来た！」
「じ、次郎の後ろ…かな？」
「誰かついてきてたか！」
「い、いや、知らないんだぜ……」
「……ちっ」
そして次郎は硬直した魔理沙を残し、素晴らしいスピードで走って消えた。

「り、理不尽だぜ……」
涙目の魔理沙が虚しく呟いた。

人里の外れにある屋台、喰いものやでは、まだ宵の口だが既に常連客で溢れていた。カウンターには慧音、妹紅と言ういつもの組み合わせに、珍しく八雲紫も並んでいた。
だが、あまり三人は楽しそうではない。何故なら目当ての次郎の様子がおかしいからだ。次郎はしきりに外を窺っており、話し掛けても上の空なのだ。いつもなら無愛想でもしっかり相槌をうつ。

どうもきな臭い様子の次郎に、三人はとうとう痺れを切らして問い詰める事にした。

「次郎様？」

「……」

「おい次郎？」

「……」

「次郎さんってば？」

「……」

誰が呼ぼうが上の空。全く取りつく島もない。流石にここまで無視されて怒り心頭のご婦人方は――

「「「次郎！！！」」」

三人の見事なユニゾンが次郎の鼓膜を襲った。

「な、なんだ一体……耳元で叫ぶな阿呆……」

耳を押さえながら漸く三人を見る次郎だった。

「何やら様子が変よ？どうしたの？次郎」

「ん～いやさ？ここ数日見張られてるみたいなんだよ俺は」

相変わらずキョロキョロしながら次郎は言う。

「なんだかわからんのだが、常に見張られている様な視線を感じるんだ。だからな、少し過敏になっている……済まない」

「見張られている、か。――一応あたりの気配を探ってみたけど、そうね？悪意のある気配はしないわ？」

「…そうか、感謝する」

八雲紫は隙間を開いてそう言った。扇子で口元を隠しながら。紫は妖しく微笑っていた。次郎は気が付かないが。

「次郎よ、何かどこぞで女子（おなご）の恨みでも買ったのでは無いか？」

慧音が白い目で責めるように言い、

「次郎さんは女誑しだね……」

と妹紅がくさす。

「……阿呆が。誑す相手などいるかよ。こちとら女日照りだっての」

忌々し気に次郎は吐き捨てた。

「「「（憎たらしい）」」」

女性陣も何やら思うとこがあるらしい。そして夜は更けていくのだった。

翌日の朝、次郎は何やら視線を感じて目が覚めた。時折慧音や妹紅が乱入したりもするが、いま感じている視線はそういう類いのものでは無い。どうもこちらを窺っているような視線だ。

次郎は布団から這い出て、そのまま匍匐前進のように朝日眩しい障子に擦り寄った。そして、音を立てないように気を配り、指一本分の隙間をそろりと開けた。そして覗く――

何かがいる――

次郎が目を凝らした先、庭の畑の奥にある茂みにそれらは居た。

青いのと緑色のと頭に何かを生やした小さいのが次郎の家を見ていた。それらは恐る恐る近寄ってきているようだ。柿の木に身を潜め、蜜柑の木に身を潜め、最後は縁の下に消えた。次郎は見覚えがあると思案する。

次郎が記憶を辿っていると、暫くして――

ことっ、ことっ……

縁側に何かが置かれた。次郎はそれをよく見ると、姿は見えないが縁の下から小さな白い手が伸び、縁側に氷漬けのカエルが次々と置かれていく。

三つ目のカエルが置かれた時に、伸びた手のその先に赤い大きなリボンが見えた。よく見たらその横には触角のようなものが見え隠れしている。その反対側には緑色の頭のてっぺんが薄らと見えた。

次郎はリボンを見てすっかり思い出した。いつぞやの湖で泣いてた妖精だと。確か名前はチルノ――次郎はにやりと笑うと忍び足で部屋から消えた。

「チルノちゃん、今のうちにだよ！」

「まだジロさん寝てるみたいだね。頑張れチルノちゃん！！」

縁側の下に上手く忍び込んだチルノ達だった。そして大妖精とリグルはチルノを励ました。

「う、うん、あたい頑張る……」

三人はここ数日の間、ひたすら次郎を捜して人里を彷徨っていた。実は捜索を開始したその日に次郎は見つかったのだ。だが、次郎を見付けた屋台には、恐ろしい大妖怪達が”うようよ”いたのだ。これでは生命に関わると三人は震え上がったのだ。所詮は妖精、大妖怪にかかれば一捻りである。

だから三人は次郎が屋台を閉めるまで草むらに身を潜め、以来、彼

をひたすら付け回した。

だが次郎は腐っても能力持ちだ。勘はそれなりに鋭い。次郎は何かにつけられていると感じたのか、三人が油断した際に彼女達を撒いたのだ。慌てて追い掛けた三人だが、結局見失ってしまった。

次の日から次郎と妖精の不可思議な鬼ごっこは始まり、紆余曲折ありつつも次郎の自宅を発見するに到ったのだ。因みに昨夜次郎の屋台を覗いていた時、隠れていた三人の目の前に大量の目玉が突然現れ、肝を冷やした三人は少しばかり粗相した。それほどの恐怖だったのだ。

そして今朝、三人は作戦を決行したのであった。

「よい…っしょ…重い…」

チルノは持参したお土産、霧の湖に住むカエルの氷漬けを縁側に乗せる。ジロは喜んでくれるかな？とドキドキしながら。そして持参した三匹全てを乗せると満足そうに息をついた。

「よし、終わった」

「後はありがとうと」

「友達になって下さい、だね！」

三人はニコニコとしながら肩を叩きあい、今日までの苦労を讃えあった。あちこち彷徨いへとへとになった。凶悪な目玉の妖怪に睨まれた。人の子に追い回され、石を投げられた。全ては今日の為の苦

労であった。

よし、と気合いを入れたチルノが縁側を登ろうとしたその時――――

「悪い子はいねぇがぁ！！！！！！！」

「「「ぎゃあああああああああああああああ！！！！！！！」」」

いつの間にか後ろから忍び寄った次郎のなまはげ攻撃に――三人は悲鳴と共に目を回して倒れたのだった。

「……んんっ……ここは？どこ……」

チルノが目を覚ますとそこは見知らぬ場所だった。ガバッと起き上がったチルノは辺りを見回すと、どうやら三人は大きな布団並んで寝かされていたらしいと気が付いた。

がららっ――

チルノが呆然としていると、部屋の扉が開いて次郎が入ってきた。

「お、起きたか。びっくりさせてごめんな？ちょっとした悪戯だったんだが、お前さん達目を回して倒れちまった」

罰が悪そうな顔をして次郎はチルノに謝った。

「あれ、ジロだ、ジロだ！」

急に笑顔になったチルノが嬉しそうに立ち上った。

「久しぶりだな、チルノ？ごめんなさいの魔法、成功したかい？」

「う、うん！ちゃんと成功した！あたい、頑張って勇気だしたらみんなと仲直りできた！！」

「そっか、良かったな？チルノ？」

そういって次郎はチルノの頭を撫でるのだった。

「う、うーん……」

「はわっ…んんん…」

二人がそんなやり取りをしていたら、大妖精もリグルも目を覚ました。

「おや、起きたかお前さん達も。さっきはごめんな？悪戯が過ぎた。俺は次郎、この家の主だ。よろしくな？」

「あ、えっと、大妖精です…よろしくお願いします、ジロさん…」

「あ、あの、よろしくでしゅ…リグル・ナイトバグと言います…蟲の妖怪です……」

大妖精もリグルも、さっきの次郎の悪戯がよほど怖かったせいか若干腰が引けているようだ。だが次郎の柔らかい物腰に、少しだけ安心したらしい。チラチラと次郎を眺めている。

チルノは胡坐をかいて座っていた次郎の前に立ち、何かを言いたげにしている。ワンピースの裾を掴んでもじもじとしているが、一向に喋らない。

「が、頑張ってチルノちゃん！」

「チルノちゃん魔法！魔法！」

大妖精達はチルノを一生懸命後押ししようと励ます。

チルノはプルプルと震えていた。次郎にありがとうと言いたい。そして友達になりたい。だけど妖精なんか嫌だなんて言われたらどうしよう。その思いがチルノの心を締め付けた。

勇気、勇気、あたいは最強だから頑張れる。チルノは必死に自分へ言い聞かせる。だが、最初の言葉がでない。

「ジロ、あたい……」

「ん～？」

「あたい……あたい……」

次郎はそんなチルノを見てため息をつくと、少し微笑した。チルノが何を言いたいかは分からないが、何やら一生懸命で、とても健気

に見えたからだ。

「チルノ、この前のパン食うか？大妖精もリグルも腹減ってるだろ？」

「え、パン食べたい！でもなんで？あたい、ジロに迷惑かけた」

「ん？せっかく友達が遊びに来てくれたのに迷惑ってなんだ？」

驚くチルノ。

「あ、あたいはジロの友達なの？」

「俺はそう思ってたが、違ったのか？迷惑か？」

「ちがっ、あたい迷惑じゃない！」

次郎の言葉にきょとんとした後、ひどく狼狽えだすチルノ。友達になりに来たのに既に友達だった？チルノは混乱の極みにいる。

「あ、あの、ジロさん」

「なんだい大妖精ちゃん」

「えと、チルノちゃんといつ友達になったのですか？」

「うーん、湖でチルノと会って、悩みを聞いて、最後はまたなと別れた。他人にはさようならと言う。でも友達ならまたなと言う。たしかあの時チルノもまたねと言ったぞ？だから友達なんじゃないかな？」

大妖精もリグルもぽかんとしている。でも言われてみたらそうかもしれない、とも思った二人であった。

「ジロ、あたい達は友達？」

「ああ、友達だ」

「大ちゃんとリグルは？」

「チルノの友達なら俺も友達かな」

「ジロ、あたい、あたい……ジロの魔法でみんなと仲直りできた。だから、その……ありがとうジロ。友達も嬉しい」

チルノは赤い顔を伏せながら、搾りだすようにありがとうと言った。

「「チルノちゃん！」」

大妖精達も笑顔になった。

「そっか、仲直りできたか。偉いぞチルノ！流石俺の友達だな。」

「うん！やっぱり、あたいったら最強ね！」

チルノに笑顔が戻り、大妖精とリグルは苦労が報われたと嘆息し、チルノの笑顔を祝福するのだった。

こうして、小さな妖精達の大冒険はハッピーエンドで幕を閉じるのだった。

「さて、パン食べたいか？」

「食べたい！！」

次郎はチルノの返事に満足そうに頷き、居間に行くぞと立ち上がった。

チルノを伴い部屋を出ようとした次郎は振り返り、まだ布団に座ったままの大妖精達を不思議そうに見た。

「お前さん達は食べないのか？」

「え、えっと、私達もいいのですか？」

「いや、良いも悪いも俺たちは友達だろう？俺はみんなに声かけたんだぞ？ほら行くぞ！」

大妖精とリグルは顔を見合せた。そして――

「「はいっ！！！」」

今朝の次郎の家は、とても明るく賑やかになった。次郎は妖精の友達の為に、ひたすらパンにハムを挟み続けたらしい。

おしまい。

――その後のお話――

チルノ達はそれ以来ほぼ毎朝、朝陽とともに次郎宅に襲来するようになった。

チルノ、大妖精、リグルの他に、ミスティア、ルーミアと言う新顔も増え、次郎は流石に辟易した。

大妖精やリグルにミスティア等は次郎の畑やパン焼きを手伝ったりとむしろ歓迎したい位だったが、チルノとルーミアは大騒ぎするので次郎もへとへとになってしまう。妖精の本領発揮と言うところであろうか？

そんなこんなで次郎は涙ながらに午前は来るなと説得し、最後まで抵抗したチルノは次郎の従業員にすると言う話で丸め込んだ。

妖精おそるべし、次郎が今回学んだ事はそれに尽きるのであった。

登場人物

次郎の友達、チルノ

次郎の友達、大妖精

次郎の友達、リグル

次郎の友達、ミスティア

次郎の友達、ルーミア

隙間を覗いてニヤリ、八雲紫

常連客、上白沢慧音

常連客、藤原妹紅

初めて名前が書かれた魔法使い、霧雨魔理沙

妖精に懐かれし男、次郎

STAND BY ME（後書き）

前回に妹紅が従業員になったので、今回はチルノが従業員になるいきさつを書きました。

巷でいうバカルテット＋αな今回でしたが、うちのチルノは所謂？なおばかさんとしてはかきませんでした。

頭のスペックは多少低いが、それより一生懸命が空回りする可愛らしいちびっこなイメージです。

ああ、チルノを娘に欲しいわ。

妖精に幸あれ

次回もよろしくお願いします。

人は見かけに因らないもの　前編（前書き）

後半まとまらず、やむを得ずに前後編に致しました。文才無くて申し訳ない。

人は見かけに因らないもの　前編

「妹紅、下拵えは終わったか？」

煮込みの火加減をしかめ面で見ている次郎が言う。

「ああ、終わったよ次郎さん。完璧さぁ」

にやりと笑いながら妹紅が胸を張る。次郎は野菜の下拵えを終えた妹紅を一瞥し、それらを見た。

「ふむ……」

「ど、どうだ？」

一つずつそれぞれを摘んでいく次郎。目を閉じ、神妙な顔で静かに咀嚼していく。それをみる妹紅は縋るような目付きで次郎を見ていた……。

時は少しばかり戻る。妹紅が喰いものやの従業員になって三日の事だ、未だ次郎は彼女を店に立たせてはいない。話が違うぞ！とごねる妹紅を次郎はバッサリと斬って捨てた。

「お前は肉を焼かせたら天下一品だ！だがっ、野菜を切らせたらチルノに劣る！故に、まだ店に立たせるつもりはない！！」

次郎の家の厨房で、床に這いつくばるように落ち込む妹紅を、次郎は刺すような目線で言った。

（チルノに劣る…チルノに劣る…チルノに劣る…チルノに劣る……）

妹紅は絶望した。”あの”不思議妖精チルノに負けている自分に。涙が出た。あまりの不甲斐なさに。それよりチルノに劣るとあの烏天狗にばれたら幻想郷では生きてはいけない。これは由々しき事態である、と妹紅は泣いた。

ピカッカシャッ――

「！？」

その時突然まばゆい光と異音が響いた。妹紅は弾かれるように窓を見ると、そこには平和の象徴、ＰＥＡＣＥのハンドサインをしながら素敵な笑顔で飛び去る烏天狗、射命丸文の姿が見えた。

「終わった……全ての意味で私終了……」

妹紅は追い掛ける気力も湧かずに崩れ落ちた。そもそも追い掛けた所であのスピード狂に追い付けなどしないであろう。

「さぁ、茶番は終わりだ妹紅。お前は一週間で野菜の下拵えを完璧に覚えて貰う！それまではここで泊まり込みで修業だ！」

悲しみに暮れる妹紅に次郎の叱咤が飛ぶ。

「チルノはいるか？」

「なにジロ。あたいったら忙しいの」

厨房の奥からチルノがふよふよと飛んできた。その手にはキラリと光る包丁がある。

「なぁチルノ、悪いけどお前さん、妹紅に野菜の下拵えを教えてやってくれないか？チルノは最強だから楽勝だろ？」

「うん！あたいったら最強だからモコに教える！モコ、あたいがあんたの先生だよ！」

次郎に煽てられご満悦のチルノは、妹紅の前に立つと笑顔で返事した。

因みに、チルノを知る者には意外であろうが、実はチルノは優秀なのだ。たしかに不思議妖精であり、計算等は全く出来ない。だが、チルノは単純作業は凄まじかったりする。

野菜を切る。米を研ぐ。下茹でする。容器に綺麗に詰める。これらは次郎が唖然とする位に上達したのだ。チルノは退屈が嫌いで落ち着きが無い。次郎はそれを逆手に取った。

作業の工程を教え、ゲームのように次郎はチルノと競争する。チルノがやり終える寸前に次郎はわざと手を抜く。すると当然チルノは得意満面になり、次郎はチルノを褒める。

そして次は「素早いチルノは素晴らしい。だけど綺麗に出来たらも

っと最強になれるな」と次郎はハードルをあげる。子供が遊ぶときの集中力に大人は適わない。だが、長くは続かない。それは飽きるのが早いからだ。ならばと次郎は工程をいくつかに分けて、遊びの種類を増やしたのだ。

結果、約一週間でチルノは計算以外の仕事は実戦レベルまでに達した。その過程で大妖精達を集め、チルノに料理を振る舞わせた。大妖精達は凄い凄いと囃し立て――（実際それなりに美味かったりする）――チルノはどんどん自信を増したのだ。

チルノはゲーム感覚に技術を上げ、人に料理を振舞い感謝される喜びを知った。そしてそれは彼女自身の自信になり、付け焼き刃では無い財産となった。

今では仕事の楽しさを覚え、自発的に店に関わっている。

因みにチルノの給料は、本人がお金の扱いが苦手なので現金は無し。その代わりに仕事が終わったら、大妖精達へのお土産としてチルノが料理を作る。そしてその材料費を次郎が持つと言う権利と、週に二回次郎にオヤツを買ってもらえる権利が給料代わりだ。もちろん大妖精達の分もだ。

そんなわけで次郎が、妹紅の指導講師としてチルノを指名したのは別に嫌がらせな訳ではない。その実力があるからだ。

苦虫を噛み潰した表情の妹紅だが、笑顔のチルノに毒気を抜かれ、大人しく「よろしくチルノ」と頷くのだった。

それから七日間、不思議妖精と不死の妖術使いと言うシュールな師弟関係は続き、毎晩のように徹夜で二人は頑張った。

そして今朝、次郎から「今日の午後に試験をやる。合格なら今夜から店に立つのを許す。だが不合格ならお前は一生下働きだ」と通達された。

緊張に膝を震わせる妹紅に、チルノ師匠は優しく肩を叩いて言った。

「あんたは大丈夫」と。

二人は抱き合い涙を流す。今日まで沢山の苦労、そして語られないドラマがあったのだろう。感極まった二人が見せる師弟愛は美しかった。

そして時計の針は元に戻り――

「ど、どうかな？」

不安そうな妹紅。柱の陰からこっそり弟子を見守るチルノ師匠。

「……合格だ妹紅。よくやったな。チルノもお疲れ様だ。さ、妹紅よ？お前も今日から正式にうちの従業員だ！」

笑顔で次郎が祝福する。師弟は号泣しなら抱擁を交わす。

「な、ならさ？次郎さん……一緒に店に立てるな？」

「ああ、そうだな」

「ふふっやったぞ……なぁ次郎さん、他人が見たら、えと、なんだ、その、夫婦って間違えられたり…ごにょごにょ……」

「ん？」

「なっ、なんでもないよ！わはははは……はぁ」

漸く次郎と並べる嬉しさに、危険な妄想をする妹紅だったが、世の中そう甘くはない。

「喜んでるとこ悪いが妹紅よ、お前さんに店主からの命令がある」

びしっと妹紅を指差す次郎。

「へっ！？は、はい」

怪訝な表情の妹紅。にやりとあくどい笑顔の次郎。

「あ～しばらく俺は泊まり掛けで出掛ける。ついてはチルノ店長代理の指導の元、平店員藤原妹紅くん、しっかりと仕事に励みたまへ

！！チルノ店長代理、後は任せた！」

「わかった！！あたいに任せなジロ！！」

ドン！と勇ましく胸を叩くチルノに満足そうに頷いた次郎は、じゃ行って来ると一声のこし、足元に開いた隙間に消えた。にゅっと出てきた白い手が「ばいばい」と振った瞬間、隙間は消えて無くなった。

チルノも笑顔でばいばいしている。

「え？え！？えええええええええええええええええええええええっ！！！！！」

事態が飲み込めてない妹紅の叫びが煩くこだまする。

「ち、ちち、チルノ店長代理！？どういう事！！？」

「ん～？えっと、ジロはユカリとめいかい？と言うとこに旅行に行くと言っていた。昨日の昨日にジロがあたいに言った。あ、モコにこれ渡せと言ってた。はいモコ」

かさかさとチルノは懐から紙を一枚だして茫然自失の妹紅に渡した。彼女がそれを読む。

妹紅の肩がプルプルと震え、背中から炎が吹き上がった。

「あの馬鹿次郎ぉ！！謀ったなぁ！！！ちっくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！」

喚く妹紅の手から手紙が落ちた。そこにはこう書いてあった。

『藤原妹紅殿、あの時はよくも色仕掛けでやってくれたね？これは意趣返しだ！チルノ”店長”代理と一週間ほど頑張ってくれたまへ。ああ、僕は綺麗なお姉さんと旅行行ってくるから。土産を楽しみにな？ではあでゅ～♪　あなたの次郎より』

結論、現実は非情である。

――東方御伽草子――

「なぁ八雲の。物凄くヤバい場所に連れてこうとかしてないか？って、ひぃぃぃ……また人魂が通り抜けてったぞっ！！」

と、次郎が騒いでいるのは置いといて、現在八雲紫と次郎は空を飛んで移動していた。八雲紫の隙間を使えば一瞬で目的地につけるのであるが、彼女曰くそれでは旅行の風情がないから駄目だと言う。

だがそもそも次郎側は旅行なんて思ってはいなかった。八雲紫が何やら畏まって友達に会ってほしい、ただ遠い場所だから泊まり掛けだと言われただけだ。

だが、気が付いたら風情のある男女旅行的な雰囲気になっていただけだ。どうしてこうなったと次郎は思うが、横で満面の笑の八雲紫を見れば、それは野暮かなと流されるのが次郎なのである。

取り敢えずは彼女と、彼女の友達とやらが住む館へと向かっているのだ。ただ、その目的地とやらが建っている場所が問題なのだ。

その場所とは冥界。

死人が住まう幻想郷の僻地である。次郎がこんな場所に住んでいる者などいるのか？と訊ねると、居るわよ幽霊がと普通に返された。むしろ何言ってんの？と言わんばかりの八雲紫の表情が、非情に勘に触った次郎である。

「これから行く場所は、白玉楼と言う場所よ。そこには大きなお屋敷があって、そこの主人が西行寺幽々子と言うの。私の……凄く古い友人なの」

そういって八雲紫は顔から表情を消した。

「白玉楼……白玉楼ねぇ……」

次郎は相槌と言うには曖昧な口調で呟く。

「”白玉楼の人となる”と言う大陸の故事成語があったな確か……。なんだったかな、そうだ、文人が死んだら天帝の使いがやってきて、白玉楼に召しいてあんたの記を書くことになったとか……よくわからんが、きっと凄い爺さんが待ち構えていそうだな」

次郎は記憶の引き出しを開けては見たものの、うろ覚えだったようできな臭い表情でそれを引っ込めた。

「お爺さんではなく、美しい少女よ？でもちょっと訳ありでね。特に何かして欲しい訳じゃないけど、ただ他愛のない話でもしてくれたらいいわ？」

くすりと笑った八雲紫は、先ほどまでの真剣な表情は消してしまった。そんなある種達観仕切ってしまったような佇まいの彼女を見つめ、次郎は充分お前さんも少女だよと思った。まぁそれはあくまで見た目だけだがね――と言ったら怒るだろうなと次郎は微妙な笑みを浮かべる。

「なあに？含み笑いなんて気味が悪いわ？」

「ん？相変わらずお前さんは綺麗だねって思ってたところさ」

「あら、うれし……でも誤魔化された気がするわ？」

「いい女ってものは、男の可愛い嘘を知ってて騙されてくれるもんだ」

「そういうものかしら？」

「そういうもんさ」

軽口を飛ばしあいながら飛行する二人に白玉楼の全景が見えてきた。次郎はふと止まり、その場に浮いたままそれを眺めた。

「どうしたの？急に止まったりして？」

隣に居たはずの次郎が動かなくなり、怪訝な表情で八雲紫は振り返る。

「ん……なに、素晴らしいなと思ってな。こんな立派な建物、俺は見たことが無いな。八雲には違和感無いのかも知れないが、普通の人間でしかない俺じゃ圧倒されてしまう。俺はこんな不思議な紫色の空は見たことないし、その真ん中に建つ白玉楼は異様に溶け込んでいる。冥界とはよく言ったものだ。確かに生を感じられない。だが、素晴らしく綺麗だ」

次郎が見ている景色は摩訶不思議である。紫色の空に人魂が飛びかい、空気は止まったかのように揺らぎは感じられない。これらを囲むように山々があり、まるで水墨画をそのまま写したようだ。そしてそこに溶け込んでいる白玉楼。巨大な建物ではあるが、不思議と自己主張は控え目に見える。つまり、全てが計算されたかのように――冥界と言う一枚の絵のように必然としてそこに存在しているのだ。

そうして圧倒されたまま茫然と佇む次郎を、くすりと微笑んだ八雲紫は彼の手を取って着地した。

二人の目の前には冥界の入り口、白玉楼の立派な四脚門が建っている。その横に一人の少女がこちらを見てたっていた。

「失礼、こちらは白玉楼です。何かご用でしょ――あ、八雲さん？珍しいですね、門からいらっしゃるなんて？」

白玉楼の門番であろう少女が八雲紫と言葉を交わす。話し振りからすると、彼女は普段は隙間で出入りしているようだ。

「ふふっ、今日は幽々子に紹介したい人を連れてきたのよ。だから彼に白玉楼の素晴らしい庭園を見せてあげたくてね？」

「それは嬉しいです！是非じっくり見てほしいです！あ、えっと……」

次郎の前に少女が立つ。艶のある銀色の髪に特徴的なサイドリボン、緑色のフレアスカート、小柄な体格と見た目は美少女と言う体である。だが彼女が異質なのは帯刀している所だ。背中に背負うようにしているのは、腰だと長刀を引き摺る事になるからだろう。

「次郎、紹介するわね？彼女の名前は魂魄妖夢。人間と幽霊の混血で半人半妖よ。彼女は白玉楼の庭師であり門番でもある。要はお庭番ね。で、妖夢？彼は次郎。能力持ちだけど人間よ。元外来人で今は人里の名物屋台の経営者よ」

八雲紫は二人を引き合わせる。

「次郎様、魂魄妖夢です。宜しくお願いします。次郎様？次郎さ、みょん！？にゃにゃにゃにゃ！！？」

次郎に自己紹介をする妖夢だったが、物憂げに彼女の周りを漂っている白いモノを眺めていた次郎が、突然白いモノを突き回し、しまいには抱き付いたのだ。

「じじじじ次郎さまぁ！やめ、やめめてくだひゃい！それは私の半身ですぅ！ひゃあ！はは破廉恥ですよぅ！！」

何やら妖しく悶える妖夢だったが、次郎は何処吹く風だ。あまつさえ頬擦りしている。

「ええぇ……ひんやりして気持ち良いぞ？」

「ちょ次郎、離したげて！それは彼女の半身だからちゃんと感覚もあるのよ？」

「仕方ないな……」

「は、はふぅ……」

渋々妖夢の半身を離す次郎だが、どこか残念そうだった。

「あ、あの、気をつけて欲しいです次郎様……そういう行為はまだ早いです……はい…」

何やらもじもじと消え入りそうな声で何やら呟いていた。次郎としては、妖夢の半身をどこかで見覚えがあると眺めていたのだ。そして、ふよふよと動く様に何かがそそられた。

つつく

柔らかい……

つつく

痙攣する……

もう駄目だった。気が付いたら抱き付いて頬擦りしていた次郎だった。ペコペコ謝る次郎に苦笑いする妖夢だが、何とか許して貰えたようだ。

「さ、妖夢？幽々子の所まで案内してちょうだい？」

「はい、では此方へどうぞ」

門が開き、歩みを進める妖夢と八雲紫。だが次郎は動かない。何やら思案しているようだ。

「次郎様？」

「次郎？どうしたの？」

二人が声をかけるが次郎は腕組みして目を閉じている。すると突然次郎が叫んだ。

「ああ！！ア〇ヒビールのビルのオブジェだ！！いやぁ、思い出せなくて気持ち悪かったんだ。あーすっきりしたわ！さ、行こう行こう！」

一週間溜め込んだ宿便がでた後のように清々しい顔で歩きだす次郎。

「ア〇ヒ」

「ビール……？」

後に残された八雲紫と妖夢はぽかんと顔を見合わせるのだった。

つづく

登場人物

新しい従業員、藤原妹紅

店長代理、実は出来る女、チルノ

ＰＥＡＣＥ！！射命丸文

綺麗なお姉さん、八雲紫

八雲紫の親友、西行寺幽々子

白玉楼の門番、魂魄妖夢

名物屋台の店主、次郎

人は見かけに因らないもの　前編（後書き）

いつもタイトル前に小話を書いて、タイトル後に本編と言う流れですが、僕のもこたん愛が大きすぎるのか、小話レベルで収まりませんでした。反省はしてますが、後悔はしてません。

チルノ……なんか魔改造されました。？ではない匠チルノとなりました。

以下一話で収まらなかった言い訳

幽々子様のキャラが定まらなかったが理由です。

フードファイターキャラにしたくなかったので、色々いじったらどんどんまとまらなくなってしまいました……。なので後編をいまこねくり回してます。

幽々子好きなんだけどね、逆に考え込んでしまった。

基本白玉楼から出ないであろう幽々子様。みょん以外の使用人幽霊は彼女にどう接しているのか？

幽々子は西行妖を眺めて、日がな静かに暮らしているのか？

生前の記憶の無い見た目は薄幸の美少女であり、幽霊となってからはほわんとしたイメージ。

この人の日常が想像つかないんですよね。

なので今、非常に悩んでいます。

可愛くかけたらいいなぁ。

最後に次郎が叫んだアサヒビールのビル発言ですが、関東に住んでない人には分からないかもなので解説します。

実在のビルでして、浅草にあるアサヒビール吾妻橋ビルと言う名前です。

金色で、まさに妖夢の半霊と言った形状のオブジェクトがビルの屋上に乗っています。

「アサヒビール　う○こ」でググると見れます。

でも実際は、炎をイメージしたオブジェクトらしく、有名フランス人デザイナーの作品らしいですよ。

僕にはう○こしか見えませんが（＾ｏ＾；

現在は品川に住んでいるので縁は無いのですが、昔は浅草に住んでいたのでうちのマンションからう○こが見えました。

仕事で疲れてふと窓を見るとそこには金色に輝くう○こ……シュール過ぎます。

以上

後編頑張ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4962x/

東方御伽草子

2011年10月28日02時12分発行